

それでは**第二テモテの 3 章**の続きを見て参ります。今回は**1 節**、そして**2 節**の丁度頭の“**自分を愛する者**”というところで終わったわけですが、改めて**1 節**から読ませて頂きたいと思います。『**1 終わりの日には困難な時代がやって来ることをよく承知しておきなさい。**』“**終わりの日**”というのは**第一テモテ 4:1**でも言及されておりました。『**しかし、御霊が明らかに言われるように、後の時代になると（終わりの時代になると）、ある人たちは惑わす霊と悪霊の教えとに心を奪われ、信仰から離れるようになります。**』この**第二テモテの 3 章の 2 節**以降そこに書かれているのが惑わす霊と悪霊による非聖書的な、異端的な教えのリストであります。で、**第二テモテ 3:1**では、その時代は“**困難な時代**”であると言われていて“**困難**”という言葉も前回紹介した通り、ギリシャ語の“**ハレポース**”という言葉で、語源は「力をなくす」という言葉です。そこから、難しい、厳しい、激しい、過酷、残酷、危険だ、という言葉だのご紹介いたしました。新約聖書では 2 回しか使われていないギリシャ語“**ハレポース**”であります。

で、もう 1 カ所は**マタイ 8:28**（『**それから、向こう岸のガダラ人の地にお着きになると、悪霊につかれた人がふたり墓から出て来て、イエスに出会った。彼らはひどく**狂暴**で（ハレポース）、だれもその道を通れないほどであった。**』）そこには“**狂暴**”というところに使われております。これは悪霊に取り憑かれた人が、狂暴である様を表した言葉です。まさに悪霊に取り憑かれた人が狂暴になるような、そのような教えが、惑わす霊と悪霊による教えであります。そのトップに挙げられていたのが“**自分を愛する者**”。これが最悪のものだということを前回お話しし、そしてこれ以上に先には進まなかったわけです。“**自分を愛する心理学**”というものがキリスト教化されて、この世の神を除いた心理学がキリスト教化されて、教理化されて教会の中にも入り込み、そして様々な弊害というものをもたらしているということを具体的な例を取り上げて皆さんにはお伝えしました。

で、そのこともちょっと思い出して頂きながら、もう一つこの“**自分を愛する者**”を後にする前に、指摘しておきたいポイントがあります。それはやはり心理学の話になるんですけども、“**自己愛性パーソナリティ障害**”というものを、皆さん聞いたことがあるかもしれません。“**人格障害**”とも言います。NPD とも言います。最近よく耳にすると思います。ニュース等でも、例えば昨今の無差別殺人。秋葉原でもありました。その犯人は“**自己愛性パーソナリティ障害**”というふうにも言われておりました。他の凶悪事件にもこの名前が、まあ病名と言って良いかどうかはちょっと語弊があるかもしれないんですが、そのような言葉がよく使われる昨今であります。まあ、それは自分への愛が膨張しすぎて、肥大化しすぎて、等身大の自分が見えなくなっている状態。それを指すものであります。世が世ならば、自分はずっと高い地位にいたはずだと。まあ、そのように考えている人たち、特に知的水準は高い場合があると。実は経営者や政治家、今の安倍総理もそうだとされていますが、“**自己愛性パーソナリティ障害**”の傾向を持つ人が多いと言われています。ネット依存症とか、SNS 依存症、ソーシャルネットワーク例えば **Twitter** とか **Facebook**、それらはもう依存症になって毎日チェックしなければ気が済まない。そういう人たちの事を依存症と言っているんですが、ホームページやブログのアクセス数を毎回数えたり、また **Twitter** のフォロワー数を数えてみたり、**Facebook** の“**いいね**”というその数を数えてみたり。「何ですかそれは？」と分からない方には関係ない話なので、いいんですけども。ただ、人が自分にどれだけ注目しているのか。自分の発信しているそのメッセージをどれだけの人を読んでくれているのか、見てくれているのか、評価してくれているのか。もうそういうことばかり 1 日中考えているわけです。ですから常にチェックしているわけです。その“**いいね**”の数が、フォロワーの数が気になってしょうがない人たち、要注意です。そういう人たちは“**自己愛性パーソナリティ障害**”の症状を抱えているかもしれません。単に自己愛とい

うのは、自分が好きだというだけではなくて、他者は、他人は、自分のために存在していると思込んでいる人たちです。で、最近確か去年ぐらいだと思いますが、NHKの特集で“新型うつ病”の特集がありました。その新型うつ病の中に、“自己愛性パーソナリティ障害によるうつ病”というものが、昨今急増しているということが紹介されました。先ほどのSNSソーシャルネットワークの依存症もその中の1つの表れだと思いますが、どういうものかと言いますと、“新型うつ病”それは仕事の時だけうつ病に陥るというものです。「ただのわがままじゃないですか。」と皆さん思うと思いますが、ただの自己中としか聞こえないかもしれませんが、仕事の間だけ鬱なので、家に帰ったらツイッターをバンバンやって、そしてFacebookをどんどんアップして、普通に生活出来るわけです。休日も、帰宅後も、通常通り、従来通り、普通に元気に生活出来るわけですが、職場に行くと、仕事に行くと、鬱になってしまう。それが“新型うつ病”です。鬱の療養中であるにもかかわらず海外旅行にも平気で行けます。そして自分の好きな趣味に平気で没頭できます。で、それをFacebookにアップして写真とか出して、上司は一体何かと。鬱のはずなのに、診断書も貰ったのに、一体どういう事かと。仮病だったのか、という話になるんですが、自分の好きな事には活発になれる、活動的になれるわけです。でも昔からの、いわゆる従来の鬱というのは、自責の念、自分を責める罪悪感、自分はダメなんだという、そういう自分を責める気持ちが強かったんですけれども、この“新型うつ病”というのは、鬱になったのは自分のせいではない。会社のせいだ、上司のせいだ、社会のせいだ、学校のせいだ。嫌なことへの逃避傾向が特徴であります。2009年にアメリカの心理学者でトゥエンギとキャンベルという人が行った調査があります。ここ10年で“自己愛性パーソナリティ障害”の発症率というのは2倍以上に増加しているということです。つい最近これが激増しているということです。アメリカの話ですが、人口の16人に1人が“自己愛性パーソナリティ障害”の経験をしていると結論づけられています。

で、その特徴なんですけれども、これは『精神疾患の分類と診断の手引き』というWHOも基準としている、世界基準になっているその中から、特徴を9項目挙げますので、耳で聞いて頂きたいと思います。

①自己の重要性に関する誇大な感覚。②限りない成功、権力、才気、美しさ、あるいは理想的な愛の空想に囚われている。③自分が特別であり、独特であり、他の特別な、または地位の高い人たちにしか理解されない、または関係があるべきだと信じている。④過剰な賞賛を求める。⑤特権意識。つまり特別有利な取り計らい、または自分の期待に自動的に従うことを理由なく期待する。⑥対人関係で相手を不当に利用する。つまり自分自身の目的を達成するために他人を利用する。⑦共感の欠如。他人の気持ちおよび欲求を認識しようとしな。又はそれに気付こうとしな。⑧しばしば他人に嫉妬する。又は他人が自分に嫉妬していると思込。⑨尊大で傲慢な行動または態度。

今挙げた9項目内で5つ以上に当てはまる人は、“自己愛性パーソナリティ障害”というふうに診断されるそうです。私は別にこれを全然診断基準とか考えていませんし、間違っても今読み上げたことで「私はこれに該当するから、5個以上あったから、あの人は5個以上ありそうだから、間違いなく自己愛性パーソナリティ障害、もう病人だ。」とか、そんなふうに勝手に思わないで下さい。これはあくまで参考までに、世界で受け入れられている、皆さんが病院に行ったらこういう項目を聞かされて、チェックされて、「あなたは間違いなく自己愛性パーソナリティ障害ですね。」と言われてしまうという、そういうものです。

他にも同じような基準なんですけれども、これはアメリカで最も有名なメイヨー・クリニックという病院があります。クリニックといっても日本にはないような大規模な病院ですけれども、そのメイヨー・クリニックの基準。

- 人より優れていると信じている
- 権力、成功、自己の魅力について空想を巡らす
- 業績や才能を誇張する

- 絶え間ない賛美と称賛を期待する
- 自分は特別であると信じており、その信念に従って行動する
- 人の感情や感覚を認識しそこなう
- 人が自分のアイデアや計画に従うことを期待する
- 人を利用する
- 劣っていると感じた人々に高慢な態度をとる
- 嫉妬されていると思いつむ
- 他人を嫉妬する
- 多くの人間関係においてトラブルが見られる
- 非現実的な目標を定める
- 容易に傷つき、拒否されたと感じる
- 脆く崩れやすい自尊心を抱えている
- 感傷的にならず、冷淡な人物であるように見える

これらもアメリカで最も権威のあるメイヨー・クリニックの自己愛性パーソナリティ障害の診断基準であります。なんでも自分の思い通りになるという空想に浸るわけです。耽<sup>か</sup>っていくわけです。内容的には自分の万能感を満たすようなものになります。すべて自分にとって都合のいいように事が進んで、最後には自分が絶大な称賛を浴びるという形を求めます。自分だけが特別に評価されて、大抜擢されて、とんとん拍子に出世するとか。もっと空想性が進んでいきますと、超能力的な力で現実に思い通りに動かすとか。あるいは過去にタイムスリップして、時代差から来る優越感に浸るとか。いろんなパターンがあるということです。聞かれもしないのに、やたらと自分のことばかりをしゃべりたがる人。話が外<sup>ほか</sup>へ移ろうとすると、強引に自分の話に戻そうとする。話の内容は自慢話ばかりで、聞いている方はうんざりしてしまう。他人にはあまり関心がないので、相手がうんざりしていようとお構いなしである。自分は特別な人間で、一般の人たちとは違うんだという認識から、庶民的な生き方を軽蔑し、そういう人たちと一緒にいることを嫌います。裏付けとなるものが何にもないのに、一目置かれる存在であることに非常にこだわります。あるいは自分という人間は特別な人間しか理解することができないのだと思ったりします。例えば、ここでは一例としてマスターソンという有名な医者がラジオで自己愛性パーソナリティ障害の話をしたところ、自分は自己愛性パーソナリティ障害なので是非治療してもらいたいという人が何人も電話をして来たということです。そのうちの10人を治療することになったんですけども、実際に治療するのは有名なマスターソン本人でないと知った時に、10人が10人とも診断を断ったということです。有名でない無名の医師ではダメだということです。他人に対する共感が乏しく、他人を自分のために利用します。他人の業績を横取りして、自分のものにしたりします。優越感に浸るために他人を利用する。他人の存在とは素晴らしい自分を映し出す鏡であるくらいにしか思っていない。ですから他人から批判されると、すぐにカッとなって怒ります。あくまで自分は優れた存在であると。もともと裏付けのない優越感ですから、話のつじつまを合わせるのに嘘をつくこともあります。本人には嘘をついているという意識はありません。ときにはホラ話のように話がどんどん大きくなって、どこまで本当なのか分からなくなります。有名人に近づくことで、自分は特別な存在だと思いつまみだします。政治的な大物に近づいて、自分の誇大感を膨らませることもあります。自分も同じ世界の人間になったかのように錯覚して、裏付けのない空想的な野心にのめりこんだりするというものです。

今までの話を聞いて、なんとなく思い浮かべた人もあるかもしれませんが、自分にも確かにこういう傾向があると、またはこれを読んでも「俺は違う。私は違う。」と、そういう人がもしかしたら自己愛性パーソナリティ障害があるのかも知れません。自分を愛するという事は、これは社会にも浸透しているんで

すけれども、この**第二テモテの 3 章**のところは、特にこれは教会内の話をしているわけです。パウロが牧会していたエペソの教会を引き継いだのは、若き後継者のテモテでありました。テモテはこの教会を牧会するのに大変手を焼いていたわけです。そしてそこには色々な違った教えをする人たちが入り込んで来て、かき乱していたということが、**第一テモテの 1 章**に書かれていたわけです。「その具体的に違った教えとはどんなものか。よく注意するように、警戒するように。」とパウロは自身の絶筆となるこの**テモテへの手紙 第二**で、もう死は目前です。皇帝ネロによって首をはねられる、その直前にこの最後のメッセージを愛する息子とも呼んでいるテモテに送ったのであります。大事なメッセージです。私たちもしっかりと押さえておく必要があります。自己愛性パーソナリティ障害なんて私は関係ないし、クリスチャンは関係ない、キリスト教は関係ない、と思うかもしれませんが、でも実際のところ今挙げたような傾向が、教会の中にも多く見られますし、もちろん牧師の中にも多く見られるものです。気を付けなくてはなりません。その元を正せば、惑わす霊によるもの、悪霊の教えによるものだということも知っていて頂きたいと思います。

で、もうこれで自分を愛する話にはピリオドを打ちたいと思いますが、その“**自分を愛する者**”の原語は“フィラトゥース” philautos という言葉です。“フィラトゥース”という言葉は、まさに「自分を愛する。」という意味なんですけれども、“フィラ”というのは“フィレア”「愛する」という言葉。“アウトス”というのが「自分自身」です。その 2 つの言葉から合成されて、“フィラトゥース”「自分を愛する者」という言葉が生まれました。

で、次に出てくるのは、『**金を愛する者**』“フィラルグロス” philarguros というのがギリシャ語です。ですから“フィガログロス” “にも、” フィリア “” フィレア “という、やはり「愛する」という言葉が含まれています。自分を愛するものは“フィラトゥース”、金を愛するものは“フィラルグロス”。“強欲”というふうにも訳せます。この言葉は**ルカ 16:14**にも使われております。『さて、**金の好きなパリサイ人たちが、一部始終を聞いて、イエスをあざ笑っていた。**』金の好きな、“フィラルグロス”。金を愛するパリサイ人。パリサイ人とは当然宗教家です。宗教家なのに金を愛する。宗教ビジネスをしていたわけです。教会の中にも金を愛する者がいます。気を付けたいと思います。必ずと言っていいほど、異端的な教えには金の匂いがつきまといまいます。偽教師たちは必ずお金の話をします。もちろん聖書にもお金の話、献金の話は出てきますけれども、ただ彼らが考えているのは、まさにどうやって教会員から、信者たちから、この集会から金を効率的に巻き上げることが、しぼり取ることが出来るだろうか。やたらめったら献金のアピールをします。何かと言っては、「献金、献金。献金すれば祝福される。献金すれば不治の病も癒される。癒されないのは、経済的にいつまでも貧困なのは、信仰がないからだ。信仰の現れである献金をしないからだ。」と。気を付けたいと思います。

で、3番目が『**大言壮語**』これは日本語でも「大げさに言うこと。できそうにないことや威勢のいいことを言うこと。口では大きなことを言っても実行が伴わないこと。」というふうに説明されます。先に自己愛性パーソナリティ障害の中で、こういう症状を持っている人たちは、やはり大言壮語するということも皆さんは聞いたと思います。自分を愛する者からやはりそれが根っこになって色々な症状となって現われとなっていくと言うところにも注目して頂きたいと思います。で、この『**大言壮語**』という言葉は、他にも**ローマ 1:30**にも使われています。実はこの**ローマの 1 章**のところに列記されている罪のリスト、それはすべての死罪に当たるという重罪です。死刑宣告されるほどの重罪ですが、この罪のリストと**第二テモテ 3 章**の惑わす霊と悪霊の教えによるその現れ、それは多々重なるところがあります。重複しているところがあります。非常に類似しているということ。つまりこの**第二テモテ 3 章**の教えは、死罪に当たるほどの重い罪であるということも覚えて頂きたいと思います。**ローマ 1:30**に『**大言壮語**』という言葉が使われていますけれども、たびたびここに目を留めて頂きたいので、一旦**ローマ 1:28 ~32**を通して読みたいと思います。『<sup>28</sup>また、彼らが神を知ろうとしたがらないので、神は彼らを良くない思いに引き渡され、

そのため彼らは、してはならないことをするようになりました。<sup>29</sup> 彼らは、あらゆる不義と悪とむさぼりと悪意とに満ちた者、ねたみと殺意と争いと欺きと悪だくみとでいっぱいになった者、陰口を言う者、<sup>30</sup> そしる者、神を憎む者、人を人と思わぬ者、高ぶる者、大言壮語する者、悪事をたくらむ者、親に逆らう者、<sup>31</sup> わきまのない者、約束を破る者、情け知らずの者、慈愛のない者です。<sup>32</sup> 彼らは、そのようなことを行なえば、死罪に当たるという神の定めを知っていながら、それを行なっているだけでなく、それを行なう者に心から同意しているのです。』今読み上げた死罪に当たる恐ろしい、おぞましい罪のリストは第二テモテ 3 章の 2 節以降にも多々見られます。ですから、自分を愛する者、金を愛する者、大言壮語する者も、やはり死罪に当たるほどの重罪であるということを心に留めて頂きたいと思います。

で、テキストの第二テモテ 3:2 に戻って頂いて、続く言葉は『不遜な者』。この『不遜な者』というのは、「他人より自分が上であることを示す」というのが原意であります。これも自己愛性パーソナリティ障害にも見られる特徴です。他人より自分が上であることを示す。単純に「高ぶる」とも訳せます。さっき読んだローマ 1:30 のところにも同じ言葉が使われています。ローマ 1:30 では『高ぶる者』と訳されていましたが、それは第二テモテ 3:2 では『不遜な者』と訳されています。原語は全く同じです。これは特別解説が要らないと思います。

で、次に『神をけがす者』。原語には“神を”という言葉はありません。単純に『汚す者』です。『冒瀆する者』とも訳せるので、『神を冒瀆する者』『神を汚す者』というふうに訳されているんですが、単純に『汚す者』です。とりわけ神を汚すということも強調していいと思うんですが、他にも「誹謗中傷する。汚い言葉、乱暴な言葉を使う者。」イメージとしては、口が悪い、口汚い、常に誹謗中傷する。同じ言葉が第一テモテ 1:13 に使われております。これはパウロ自身の言葉です。パウロが自分自身について語った言葉です。『私は以前は、神をけがす者』復活のキリストに出会って、目からウロコの体験をして、改心する前は、ノンクリスチャンの時にはパウロは自らを“神をけがす者”冒瀆する者、誹謗中傷する者、口悪く口汚くクリスチャンを罵り、侮辱し、馬鹿にし、迫害し、そして殺害したのであります。それがそこに書かれているパウロ自身の言葉です。昨今では韓国だとか、北朝鮮だとか、中国に対して反韓、反朝、反中とか、いろんなヘイトスピーチというものが社会問題になっています。ヘイトスピーチ、ヘイトというのはもちろん憎しみです。憎しみのスピーチ。それは憎悪表現と日本語で訳されます。喧嘩言葉を発するわけです。差別用語を連発するわけです。今日のニュースにもありましたけれども、大学生の 6 割がヘイトスピーチが何かを知らない。平気で差別用語を使う。教会の中でもキリスト・イエスにあっては男も女もないのに、ユダヤ人もギリシャ人もないのに。いろんな口汚い言葉、悪い言葉、誹謗中傷するような言葉。それは教会では絶対に聞かれてはいけないもの。そうした言葉をクリスチャンが間違ってもソーシャルネットワークを使って発信してはいけないということも知って頂きたいと思います。これは惑わしの霊、悪霊の教えによるものだと思います。

日本はキリスト教圏ではないので、あまりこの神を冒瀆する言葉を日常的に使う事は少ないとは思いますが、でも例えばアメリカなんかではよく神の名前を侮辱的に使います。神もイエス・キリストも口汚く罵る時によく使うわけです。十戒にも『主の御名を、みだりに唱えてはならない。』と言われてますけれども、それも 1 つは神を汚す行為です。アメリカのクリスチャンでも平気で使うんです。Oh, my God. とか、それも柔らかい表現ですけども、それはそれほど口汚いという部類には入りませんが、でもそれも実はみだりに使っているんです。God という神の言葉を Gosh (ガッシュ) と言ったり、Jesus というイエスの名前を Jee(ジー)と言ったり、そういう言葉が平気でクリスチャンのコミュニティでも使われます。日本では実際にそのような用例は見出せませんが、でも気を付けたいと思います。「主よ、主よ。」と呼ぶ者が皆、天の御国に入るのではありません。天の父の御心を行う者が入るとありますから、ただ「主よ、主よ。」とむやみやたらに、みだりに唱えている者が皆、天国に行くわけではないんです。気を付けた

いと思います。

で、次にテキストに戻って頂いて『**両親に従わない者**』。これも先ほど開いたローマ 1:30 では『**親に逆らう者**』というふうに表現されて、やはり死罪に当たると言われています。旧約聖書の律法を見ても、両親に従わない者、両親を侮辱する者は、やはり死罪に相当する重罪だと言われています。「でもそれは旧約の律法じゃないですか。」と思うかもしれませんが、**エペソ 6:1**。エペソはテモテが牧会する教会です。ですから**エペソ人への手紙**と**テモテへの手紙**、重ねて読んで、並行して学んでいただくと非常に有意義だと思います。**エペソ 6:1**にこうあります。『**子どもたちよ。主にあって両親に従いなさい。これは正しいことだからです。**』新約でもこのことが命令されています。で、**2節**には『**「あなたの父と母を敬え。」これは第一の戒めであり、約束を伴ったものです。**』パウロも重要視しています。これは“**第一の戒め**”だと強調しています。ところがこの社会でもそうですけれども、残念ながら教会の中でも、両親に従わないクリスチャンの子弟たち。世の終わりのサインであります。学級崩壊もしています。先生の言うことを聞かない。そういう子供たちは家でも親の言うことを聞かないわけです。親の言うことを聞けば先生の言うことも聞きます。目上の人や大人の言うことも聞きますけれども、両親に従わない、これは学級崩壊どころか社会崩壊につながる恐ろしい、おぞましい罪だということを覚えて下さい。「まだ小さい子供だから。年端もいかないから。可愛いから。うちのエンジェルちゃん。」なんて思わないで下さい。このまま放っておけば彼らは自己愛性パーソナリティ障害と診断されかねないということを、勿論聖書ではそれを罪と言っています。ただの病ではありません。それは病的な状態ですが、罪です。両親に従うこと、それは神が立てた権威に従うということです。両親に従わないということは、両親を立てられた神に従わないことを意味しています。ですからこれは重罪なんです。どんな親でも関係ありません。「うちの親は尊敬出来ません。だから従いません。」とんでもありません。聖書にはそのような条件は設けられていないんです。どんな親であろうと従いなさい。もちろん例外としては、信仰に抵触するケースもあります。犯罪行為を命令されたら、もちろん断ることも出来ます。従わないという選択もできます。人に従うより神に従うべきだというその選択肢もあるということもバランスを持って考えて頂きたいと思います。ただ、両親に従うという事は、これは主の目に正しいことだということ。あなたの目に正しいかどうかじゃないんです。主の目に正しいことをクリスチャンは選ぶべきです。

で、7番目に挙げられているのが『**感謝することを知らない者**』「不作法」とか「無礼」というふうにも訳せます。このことは**ルカ 6:35**に使われています。**ルカ 6:35**では『**恩知らず**』というところにこの言葉が使われています。『**ただ、自分の敵を愛しなさい。彼らによくしてやり、返してもらうことを考えずに貸しなさい。そうすれば、あなたがたの受ける報いはすばらしく、あなたがたは、いと高き方の子どもになれる。なぜなら、いと高き方は、恩知らずの悪人にも、あわれみ深いからです。**』恩知らずの人は悪人であります。神の子どもたちは、恩知らずの悪人であってはなりません。愛は礼儀に反することをしません。不作法、無礼ではないわけです。親しい仲にも礼儀ありと言っていますが、クリスチャンは誰よりも感謝を捧げる者でなくてははいけません。これは神の御心だと、**第一テサロニケの 5章**に言われています。

『**すべての事について、感謝しなさい。これが、キリスト・イエスにあって神があなたがたに望んでおられること。**』御心だと言われています。感謝しなさい。聖書の中には何度となく命令されています。クリスチャンは感謝する人たち。誰よりも感謝という言葉が口から発せられる人たち。「ありがとう。」毎日どれだけ言っているのでしょうか。夫婦の間で互いにどれだけ感謝の言葉を掛け合っているのでしょうか。今日あなたは自分の夫に、自分の妻に「ありがとう。」と言いましたか。自分の子供に、自分の孫に、自分の親に、自分のお爺ちゃん・お婆ちゃんに「ありがとう。」と言ったのでしょうか。友達に、兄弟姉妹に、今日ここに来る前にこの会場の掃除をして、そして綺麗に準備万端整えてくれたその奉仕者たちに「ありがとう。」というねぎらいの言葉を今日言ったのでしょうか。私はまだ言っていないので、ここで言いたいと思います。

感謝いたします。毎日毎日よくやって下さっています。人が居ようと居まいと、誰が見てようと見てまいと。そのようにクリスチャンは誰でも感謝をする人たちです。それが神の子どもたちの特徴です。悪人、罪人は感謝することを知らない人たち。で、そういう人たちが世の終わりになると激増してくるということです。ですから、世の終わりのサインだと思って頂きたいと思います。

で、次に 8 番目『**汚れた者**』。これは直訳すると『**聖くない者**』です。同じことですが**第一テモテ 1:9** そこに同じ言葉が使われています。『**すなわち、律法は、正しい人のためにあるのではなく、律法を無視する不従順な者、不敬虔な罪人、汚らわしい俗物、父や母を殺す者、人を殺す者、**』“汚らわしい俗物”というのが『**汚れた者**』と同じ言葉です。『**汚らわしい俗物**』聖くない、世俗的な者ということです。聖いという言葉は、この世から聖め別たれた“**聖別**”という言葉です。区別されている。この世とは違う。でもこの『**汚れた者**』はこの世と全く同じ、**汚らわしい俗物**ということです。この世的、世俗的、この世の人たちと何ら変わらない、ノンクリスチャンと何ら変わらない。それが**汚れた者**という意味です。教会の中にもこういう人たちが増えてきているということです。言われなければクリスチャンがどうかも判らない。それが汚れた者です。職場の人に、ある時に「実は私はクリスチャンなんです。」「えっ知らなかった。クリスチャンとは思っていなかった。」それが彼らノンクリスチャンの反応だったならば、恥です。あなたが「実は私はクリスチャンです。」と言った途端に「やっぱりそうだったの。何か違うと思っていました。」という反応ならば、主はあなたのことを喜ばれているということです。あなたは汚れた者ではありません。聖い者です。

次に 9 番目、テキスト 3 節。『**情け知らずの者**』この言葉も**ローマ 1:31**に使われておりました。もちろんこれは死罪に当たる重罪だということ、『**情け知らずの者**』。ギリシャ語では“アストルゴス” astorgos という言葉です。ギリシャ語で“ア”というのは否定型なんです、その後に“ストルゴス”という言葉が使われていますが、“ストルゴス”というのは“ストルゲー”という言葉で「家族愛」です。ギリシャ語には 4 つの愛があります。1 番有名なのは、クリスチャンが一番知っているのは「アガペーの愛」神の愛とよく言われます。価値のない者に価値を見出す愛。相手から見返りを求めない、自己犠牲の伴う愛、無条件の愛、全部これはアガペーと言います。ですからよく「神の愛」と表現されます。で、もうひとつが、自分を愛するとか金を愛するの『**愛する**』に使われていた“フィロス”とか“フィレア”。これは特に兄弟愛、同胞愛。で、もうひとつが“ストルゲー”この『**情け知らずの者**』に使われている言葉で、家族愛、親子愛。で、もうひとつがこの世で一番よく知られているギリシャ語の愛“エロス”男女の性愛です。もちろん本来は卑猥な愛ではありません。男女の健全な、純粋な恋愛ということです。アガペー、フィリア若しくはフィレオ、そしてストルゲー、そしてエロス。ギリシャ語には 4 つの愛があります。で、この『**情け知らずの者**』は“アストルゴス”で、“ア”というのは「無い」、家族愛が無い、親子愛が無い。ですから「自然の情愛が無い」というその状態です。親子なのに、家族なのに憎み合い、傷つけ合い、そして殺し合う。一昔前は「考えられない。」と思うかもしれませんが。水曜日に私は連帯保証人の話を皆さんにしたんですが、私の家は父が連帯保証人になってしまって、そして詐欺師に騙されて大変な目にあったという話をしましたが、実はその詐欺師というのは、私が子供の頃に親をバットで殴り殺したというその人のお兄さんなんです。皆さんもその頃、私が子供の頃の話です。覚えてらっしゃるでしょうか。子供が親をバットで殴り殺したという、それまではあまり聞いたことがなかったニュースだと思いますが、そのお兄さんが私たち家族を狂わせた人物なんですけれども、でも今となってはどうでしょうか。「子供が親をバットで殴り殺す。そんなの、よくある話じゃないですか。」世の終わりのサインなんです。一昔前は珍しい、ショッキングだ、前代未聞だ、聞いたことも無い、そんなこと絶対にあってはいけないし、あまりに非現実的だと思うかもしれませんが。全然身近に感じないもの。でも昨今はどうでしょうか。そういうニュースが毎日報道されても、別段驚かなくなってしまうわけです。「またか。」ぐらいですね。『**情け知らずの者**』

が世の終わりになりますと横行してきます。で、もちろんクリスチャン・コミュニティ外の話ではないということを知って下さい。クリスチャン・コミュニティの中でも『情け知らずの者』が横行してくるとなれば、もうまさに世の終わりだということです。日本語でもよく「世の末だ。」と言います。いろんな凶悪事件とか、嘆かわしい事件があると「ああもう世も末だ。」と。学校の教師が生徒に性的暴行をする「世の終わりだ。」警察官がストーカーをする「世の終わりだ。世も末だ。」と。でも本当の世の末は、クリスチャンがこういうことをする時、それは世の末なんです。まさに文字通り、クリスチャンがこういうことをするようになったら、世も末だと。で、昨今では牧師もこういうような罪を犯します。恐ろしいですね。

で、10番目のリストとして『和解しない者』実はローマ1:31にこの言葉は使われているんですが、新改訳聖書には使われておりません。というのは写本によってローマ1:31には『和解しない者』が有るもの、無いものがあるからです。ただ写本によってはローマ1:31には『和解しない者』を含めた写本があるということを知っておいて下さい。で、もちろんこれも死罪に値する罪に相当します。『和解しない者』という言葉は、「契約を破る」という言葉から来ています。約束を破る、契約を破る。いろいろな約束、いろいろな契約がありますが、結婚も契約のうちのひとつです。家を借りるにも契約をするわけです。家賃を払うという取り決めをするわけです。で、もちろん家賃を払わない、滞納すれば、契約違反ということになります。結婚もお互いに契約を結ぶわけです。でも、それを平気で破るわけです。日本の結婚式のおよそ6割、地域によっては7割8割はキリスト教式、教会式、チャペル式で行われると言われてます。当然そこでは、神の前で誓うという、クリスチャンでないと出来ないことをノンクリスチャンにやらせているのはそもそも問題だと思いますけれども、でも神の前に誓うわけです。これは重いことです。本来であれば重いことです。これを破るという事はやはり死罪に値するわけですが、日本でもおよそ2分に1組離婚しています。3組に1組とも言われています。アメリカでは2組に1組と、もう50%位です。でも、実はアメリカではクリスチャン夫婦もこの世の夫婦とほとんど同じ離婚率であるということを知って下さい。ところがもう一つの統計として、クリスチャンの夫婦が毎日聖書を読むのであれば、その離婚率は激減します。その離婚率とは、0.1%になります。クリスチャン夫婦でも毎日聖書を読まないカップルであれば、この世のカップルとほとんど変わらないほどの離婚率になってしまう。クリスチャンなのにと思われるかもしれませんが、世の終わりになると『和解しない者』が教会の中にも横行するわけです。契約を平気で破る者。牧師も、牧師夫婦も離婚します。非常に残念なことです。で、もちろん最大の犠牲者は子供があれば子供です。そしてその子供も離婚する可能性があります。確率も高くなるということです。社会は必然的に崩壊します。最小単位が夫婦なんです。夫婦が崩壊すれば社会も崩壊します。先ほどの『両親に従わない者』というのも1つですが、その両親が、夫婦が崩壊していれば、親子関係は当然崩壊するものであります。だから、学級崩壊とか言われますけれども、その問題児とされている子供は大抵片親であるとか、家庭で十分に両親から愛情を受けられていない子供たち、関心を持たれていない、放棄・放任・ネグレクトされているような傷ついた子供たちです。子供が問題じゃないんです。子供がトラブルメーカーじゃないんです。トラブルメーカーはその親です。学校の先生ももちろん足りないところもあるでしょう。でも教育の力では、学校の力では、どうにもならないんです。

そして11番目、『そしる者』この原語は“ディアボロス” diabolosであります。たびたび紹介しています。“ディアボロス”というのは英語にもなっています。ですから聖書を引いても、“ディアボロス”が出てきます、でもそこには“悪魔”というふうに出てきます。実は“悪魔”という言葉はギリシャ語では“ディアボロス”です。『そしる者』は“悪魔”と訳せるんです。で、『そしる者』は、中傷する者、悪口を言う者、虚偽の訴えをする者。それが悪魔なんです。“悪魔”とは文字通り「中傷する者」です。私たち兄弟たちを神の前で日夜訴えている者、黙示録12章にも出てきます。それが悪魔です。『そしる者』、中傷する者、悪口を言う者、虚偽の訴えをする者。嘘をついて訴えるわけです。偽りの父と呼ばれています。第一

テモテ 3:11 にも“ディアボロス”という言葉が使われていました。ここには教会のリーダーシップの資格・資質についての言及があって、婦人執事、執事の妻とも言います。その資質にこの言葉が見られます。

『婦人執事も、威厳があり、悪口を言わず、自分を制し、すべてに忠実な人でなければなりません。』“悪口を言う”という言葉が“ディアボロス”です。悪口を言う、陰口を言う、ゴシップをする。これは全部悪魔的な罪であります。気軽に人の噂話とか、陰口とか、ゴシップをしてはいけません。これは悪魔的なおぞましい罪です。当然のことながら悪魔的な罪は死罪に値します。教会の中で兄弟姉妹のことを中傷してはいけません。ゴシップをしてはいけません。それは悪魔と同じ行為だということです。

で、テキストに戻って頂いて 12 番目『節制のない者』これは説明が不要だと思います。不節制、セルフコントロールが出来ない者。これも世の終わりになるとどんどん急増してくるということです。いろんな節制があると思います。感情の節制もあると思います。すぐに切れる、すぐにブチ切れるとか、すぐに感情的になる、発狂する、ヒステリックになる、怒鳴りつける、すぐに傷つく、自己憐憫に陥る。ちょっとしたことで先にも挙げた自己愛性パーソナリティ障害にも、ちょっとしたことを言われて深く傷つく。感情のコントロールができないわけです。自分は平気で人のことをきつく言ったりするんですけども、自分がきついことを言われるとすぐに傷つくわけです。それもひとつ例として挙げられると思いますし、他にも生活習慣において節制ができない。夜中の 2 時頃になるとお腹が空いてくるわけです。そうするとついつい私なんかはラーメンを思いついてしまうんですけども、それを食べていれば当然不節制でメタボ、そして生活習慣病になっていくわけです。勿論食べ物だけじゃありません。他にも嗜好品、悪習慣もあります。タバコが止められない。お酒が止められない。ポルノが止められない。インターネットのポルノサイトに釘付けになってしまう。中毒になってしまう。会社に行っても、これも水曜日の箴言の学びでお話しましたが、大抵のビジネスマンは会社でコンピューターを扱っている場合、ポルノサイトを見えています。「うちの夫がまさか。」なんて思っているかもしれませんが、あなたの夫はどうか分かりませんが、隣の同僚は見ているかもしれません。可能性は非常に高いわけです。携帯電話やスマートフォンの普及もそれに拍車をかけています。節制ができないわけです。

で、次に 13 番目のリスト。それは『粗暴な者』。“荒々しい者”とも訳せます。これは当然、性格的に荒々しい。説明がこれ以上必要ないと思います。乱暴である。暴虐であるということです。本来クリスチャンは柔和でなければいけない。なのに荒々しい。寛容でなければいけない。なのに粗暴である。忍耐強くなければいけないのに、正反対です。

14 番目『善を好まない者』直訳は『善を愛さない者』“愛する”という言葉。自分を愛する、金を愛するという言葉と同じです。『善を愛さない者』全く同じ言葉がテトス 1:8 にも使われています。これもパウロが若き後継者の 1 人テトスに宛てた手紙に使われています。『かえって、旅人をよくもてなし、善を愛し、』この“善を愛し”の否定型が『善を好まない者』として第二テモテ 3:3 に使われているわけです。『善を愛する』の否定型です。ですからこれはクリスチャンがやらないことです。クリスチャンとは全く正反対の者。クリスチャンは善を愛する者、そうでないものは善を愛さない者です。

大体このリストはクリスチャンとは正反対の者を指すという事は、もうみなさんもイメージがついていると思います。そういう印象でこれまでも見てきていると思いますが、そのまま引き継いで頂いて、今度は 4 節。15 番目『裏切る者』これは使徒の働き 7:52 にも使われています。その終わりのところに『この正しい方を（つまりイエス・キリストを）裏切る者、殺す者となりました。』これはステパノの言葉です。彼がパウロによって迫害され、まさに石打ちの刑にされて殉教する直前の姿です。ユダヤ人に対して、この正しい方イエス・キリストをあなた方ユダヤ人は、宗教家たちは、パウロのことも含めて、裏切った。殺す者となったと。イエスキリストを裏切るという、その典型はイエスの弟子の 1 人イスカリオテのユダであります。ユダに対しても使われている言葉です。ルカ 6:16 にその言葉が使われています。（『ヤコブ

の子ユダとイエスを裏切ったイスカリオテ・ユダである。』) イスカリオテのユダは裏切る者と紹介されています。同じ言葉です。教会の中にもイスカリオテのユダがいるということです。イエス・キリストを裏切る者、殺す者が1人や2人ではない、沢山出てくる。第一ヨハネの手紙では偽キリスト、反キリストが世の終わりになると大勢現れると言っています。弟子の振りをするわけです。まるで熱心な弟子であるかのように、忠実な弟子であるかのように振る舞うわけです。でも自分の都合が悪くなると、手のひらを返したようにして裏切るわけです。

次にテキストに戻って頂いて4節に16番目『向こう見ずな者』。『向こう見ずな者』は軽率、無鉄砲、無謀、無茶と訳されます。皆同じ言葉です。同じ言葉が使徒の働き 19:36 に使われています。(『これは否定できない事実ですから、皆さんは静かにして、軽はずみなことをしないようにしなければいけません。』)

“軽はずみ”というところに同じ言葉が使われています。軽率、軽はずみ。何も考えずに、御言葉でよく吟味した上ではなくて、思いつきで、勝手な発想で、その時の気分で、その時の勢い・流れで、特別神様に伺いを立てることもなく、祈ることもせずに、軽はずみ、平気で罪を犯すこともあります。的外れなことをしてしまうこともあります。こういう向こう見ずな者が、もちろん昔からあるんですけども、世の終わりになると急増するというのが、世の終わりの特徴です。教会の中にもこういう人たちが増えてくるということです。

で、17番目『慢心する者』。『慢心する者』は直訳すると「煙を上げる者」。モクモクと煙が上がっていると目立ってきます。これは“高慢”というふうに訳される言葉です。第一テモテ 3:6 に“高慢”と訳されています。『また、信者になったばかりの人であってははいけません。高慢になって、悪魔と同じさばきを受けることにならないためです。』高慢という言葉がそこに使われています。そして第一テモテ 6:4『その人は高慢になっており、何一つ悟らず、疑いをかけたり、ことばの争いをしたりする病気にかかっているのです。そこから、ねたみ、争い、そしり、悪意の疑りが生じ、また、知性が腐ってしまって真理を失った人々、すなわち敬虔を利得の手段と考えている人たちの間には、絶え間のない紛争が生じるのです。』この部分は今私たちがテキストにしている第二テモテの3章にも見られるものです。同じような言い回しが出てきますから分かると思います。常に煙を上げている人たち、慢心する者、高慢な者、自分に注目を集めようとするわけです。この高慢の罪はサタンが最初に犯した罪でもあります。神のように、いと高き方のようになろう。そしてその同じ罪を、最初の人、アダムとエバも犯したわけです。神のようにになりたい。善悪の知識の木の実を食べたわけです。罪の根源であります。

で、最後に18番目として『神よりも快楽を愛する者』とあります。これも直訳すると「神を愛する者よりも、快楽を愛する者になる。」と。同じことなんですけれども、その直訳を紹介することで、この1連のリスト、1番目から18番目まで。最初は『自分を愛する者』から始まり、最後は『神よりも快楽を愛する者』直訳は「神を愛する者よりも、快楽を愛する者」。結局ここで言われている事は、すべてひとまとめに、端的に説明すれば、神を愛する者とは正反対の者たちのリストです。それが『自分を愛する者』から始まって、最後は『快楽を愛する者』に終わるもの。神を愛するとは正反対の状態。イエス・キリストが世の終わりになると、「不法がはびこって多くの人の愛が冷たくなります。」と言いました。マタイ 24:12 にあります。世の終わりの特徴のひとつとして「不法がはびこるので多くの人の愛が冷たくなります。」愛が冷たくなるんです。何に対する愛かという、神に対する愛、神の言葉に対する愛、それが教会の中でも冷めてくるんです。だから神よりも自分を愛する、神よりも快楽を愛する、金を愛する。そして神の言葉よりも違った教えを愛する。聖書に書かれていないような耳障りの良い言葉、受け入れやすい言葉、自分にとって都合の良い言葉。気を付けなさいということです。それは世の終わりのサインである、特徴であるということです。このような人たちが教会の中にこれから増えてきます。世の中はもとより、社会はもとより、教会の中にも増えてくるということです。5節を見ていただくと『見えるところは敬虔であっ

でも（見た目は経験、熱心、立派なクリスチャン。この5節があるので2～4節のリストは教会の中の人たちを指しているということが分かります。この世の人たちは、見えるところは敬虔ではないわけです。まったくのノンクリスチャン、不敬虔ですが。見えるところは敬虔、まるでクリスチャン。クリスチャンばい。でもその実を否定しているということです。ただの自称クリスチャンと言うことです。）、**その実を否定する者になるからです。こういう人々を避けなさい。**』“その実”という言葉は直訳すると「その力」です。実力と言ってもいいかもしれませんが、“実”という言葉のギリシャ語はお馴染みの“デュナミス”です。英語の“ダイナミック”ダイナマイトの語源ですから、「爆発的な力」ということです。使徒の働き1:8に使われている言葉です。『しかし、聖霊があなたがたの上に臨まれるとき、あなたがたは力を受けます。』“力” デュナミス。またはヘブル4:12『神のことは生きていて、力があり、』の“力”もデュナミス。聖霊の力、御言葉の力、それを否定するわけです。クリスチャンを自称しているのにです。見えるところは敬虔なのに、その実を、その力を否定するわけです。こういう人々を避けなさいと言われていきます。注意して下さい。こういう人々を避けなさい。

6節に『**こういう人々の中には、家々には入り込み、愚かな女たちをたぶらかしている者がいます。その女たちは、さまざまの情欲に引き回されて罪に罪を重ね、**』“愚かな女たち”というのは直訳すると「小さな女たち」です。別に背が低い人たちのことを言っているわけではありません。要するに大きくない、重要でない人たち、女たちです。偉大でない、小さい、ちっぽけな人生を生活している人たちは、愚かな女というふうに言われるわけです。ここにしか使われていない特殊な言葉です。そして“たぶらかす”というところには、新改訳聖書は\*印が付いていて、欄外には「別訳『とりこにして』」とあります。「虜にする」というのが直訳です。完全にこの小さな女、愚かな女たちは、これらの教えに虜になっている。たぶらかされているわけです。先週お話ししたような、“自分を愛する心理学”、この虜になってしまっているわけです。田中信生という人の名前も挙げました。セックススキャンダルで地に堕ちた人です。未だにでも活躍しています。未だに何万円というセミナー料を取っています。トータルカウンセリングスクール、日本各地でやっています。知らない人たちは高いお金を払って、受講料を払って、そうしたところに入出入りするわけです。その中の受講者はほとんど女たちです。残念なことに、虜になっているんです。たぶらかされてしまっています。それは一例として具体的に挙げました。このテモテへの手紙の中にも、違った教えをする人たちの名前が、具体名が、実名が挙げられているので、私もそれに倣って言っているわけであり、もちろん田中信生という人が、偽教師であって、ノンクリスチャンだとは言いません。たぶん救われていると思います。でも彼もまたたぶらかされているとしか言いようがありません。なぜならば“自分を愛する”なんていうことは、聖書のどこにも書いてないからです。聖書には神を愛することと、隣人を愛すること以外には命令されていません。逆に自分を愛する事は最も危険な罪であると。世の終わりの特徴だと言われていきます。「自分を愛せない人は隣人も愛せないじゃないですか。」サタン戯言に騙されてはいけません。

で、話を戻していきたくと思いますが、もう一つ“さまざまの情欲”という言葉にも注目して下さい。『その女たちは、さまざまの（いろんな種類の）情欲に引き回されて罪に罪を重ね、』と言われていきます。同じ言葉がテトス3:3にも使われています。『**私たちも以前は（以前はというのは、イエスキリストを知る前、ノンクリスチャンの時は）、愚かな者であり（愚かな男であり、愚かな女であり）、不従順で、迷った者であり、いろいろな欲情と快楽の奴隷になり、悪意とねたみの中に生活し、憎まれ者であり、互いに憎み合う者でした。**』“いろいろな欲情”というところが全く同じ言葉です。“さまざまの情欲”とテモテでは訳されています。ノンクリスチャンの姿です。ですから“さまざまの情欲に引き回されて罪に罪を重ね”ているというのは、ノンクリスチャンの状態と全く同じです。もちろんこの情欲の中には性的な情欲も含まれていますけれども、“さまざま”とありますから必ずしも性的な欲情・情欲・快楽に限定されないもの

だと思えます。性的にふしだらな女性たちのことだけを言っているのではありません。いろんなものに心を奪われていくそのさまです。聖書の教えだけじゃなくて、この世の教え、世俗の教え、流行の教え、自分を愛する心理学、セルフ・エスティーム。聞こえがは良いわけです。皆そちらに、自己啓発、自己実現、魅力的な教えにどんどんはまっていってしまうわけです。それは男を取っ替え引っ替え変えるような、情欲に引きまわされているような姿であります。実は**第二テモテ 4:3**にもこの“情欲”という言葉が使われているんですが、一読しては分かりにくいんです。『**というのは、人々が健全な教えに耳を貸そうとせず、自分につごうの良いことを言ってもらうために、気ままな願いをもって、次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め、**』世の終わりの特徴がここにも言われていますが、この中に“気ままな願い”という言葉があります。これが“**さまざまの情欲**”の“情欲”という言葉であります。情欲を持って次々に教師たちを自分たちのために寄せ集め。もちろんその場合の情欲は、別にセックスの相手ということではありません。自分たちの欲望を満たすための教師たち。肉欲を満たすための教師たち。聞きたい事を言ってもらえる、そういう欲です。都合の良いことを言ってもらえる、耳障りの良いことを言ってもらえる。そういう欲を満たす教師たちを寄せ集め、招いて、セミナーに参加して、本を読んで。そういうに時代なるとこれはもう世の終わりだということなんです。

また**テトス 2:12**にも同じ言葉が使われています。『**私たちに、不敬虔とこの世の欲とを捨て、この時代にあって、慎み深く、正しく、敬虔に生活し、**』とありますが“この世の欲”というところ、その“欲”がやはり情欲と同じ言葉です。ですから単純に性的な欲情だけを指す言葉ではない事は明らかです。“この世の欲”さまざまあるわけです。いろんな欲です。自分の夢を叶えたい、自己実現したい。これも欲です。キリスト実現ではなくて、キリストのようになるのではなくて、セルフイメージを上げたい。自分が望むような自分になりたい。神が望むような自分ではなくて、それを満たしてくれるのが、“自分を愛する心理学”、セルフ・エスティーム。気を付けたいと思えます。

で、次にテキストに戻って頂いて**第二テモテ 3:7**『**いつも学んではいるが、いつになっても真理を知ることのできない者たちです。**』**テモテの手紙**でも言われていました。ここに繰り返されています。“いつも学んでいる。”しょっちゅうセミナーがあればそこに飛んで行く。遠くても旅費をかけて。受講料高くても払って。たくさん本を買い込んで、たくさんテープを買い込んで。いつも学んでいるんです。彼らは熱心です。でもいつになっても真理を知ることが出来ない。皮肉ですね。イエス・キリストは「あなた方が真理を知り、真理はあなた方を自由にする。」とおっしゃいましたが、いつになっても彼らは縛られたままです。そこに行かないといけないという。セミナーがあれば、道場があれば、スクールがあれば、そこに行かないと癒されない。そこに行かないと満たされない。縛られているじゃないですか。それは真理じゃないんです。真理はあなたを自由にするものです。真理を知ることが出来ないというのが、本当に皮肉なものなんです。

**第二テモテ 2:25**『**反対する人たちを柔和な心で訓戒しなさい。もしかすると、神は彼らに悔い改めの心を与えて真理を悟らせてくださるでしょう。**』そうしたものにたぶらかされている、はまって虜にされている人たちに対して、私たちは何をしなければいけないのか。“**柔和な心で訓戒しなさい。もしかすると、**”真理を悟らせて下さるかも、理解させて下さるかもしれない。諦めないで下さい。“**柔和な心で**”とありますから、ブチ切れないで下さい。非寛容にならないで下さい。「何度言っても分からない。なんと頑なな人だ。」逆に聖書しか信じないと言えば「頑なだ、狂信的だ、カルトだ、原理主義者だ。」と逆ギレして口汚く罵ってくる。そんな彼らを柔和な心で訓戒しなさい、と言われてます。

また**第一ヨハネ 2:4**も参照して頂きたいと思えます。『**神を知っていると言いながら（クリスチャンだと言いながら、イエス・キリストを信じていると言いながら）、その命令を守らない者は、偽り者であり、真理はその人のうちにありません。**』クリスチャンならば神の命令、聖書に書かれていることを守らなければ

ばいけません。自分を愛する、というのは聖書の命令に反することです。逆に愛してはいけないと言っているんです。もともと愛しているんです。だから自分を愛するように隣人を愛しなさい。何でも自分が第一。疲れていても自分のことを考えています。どっか蹴躓<sup>けつまず</sup>いても痛いと思って自分のことしか考えません。痛いと思ったその時に「あの人はどうだろうか。」とか、「今どうしているだろうか。」なんて思わないわけです。もう自分のことにかかりつきりです。それと同じように「隣人を愛しなさい。」と言われていているわけです。自分の体を愛するように妻を愛しなさい。「誰でも自分の身を憎んだ者はいない。」と聖書は逆に「自分のことが嫌いです。」自己嫌悪に陥っている人もまた自分を愛しているんだというふうに言っているわけです。なぜなら自分のことしか考えないから。「嫌いです。」と言うのも自分のことを考えているんです。リストカットする人も、それも自分が嫌いじゃないんです。自分が大好きなんです。だから自分を傷つけて、目立とうとするわけです。見て欲しいんです。感じて欲しいわけです。厳しい言葉ですけれども、これが真実であります。でも、その自分から解放される。それがキリスト教の救いです。セルフ・イメージなんかどうだっていいんです。あなたは神のイメージに作られているから。もう罪によって歪んだセルフ・イメージをなんとか修復しようなんていうことは止めていいんです。そんなものに躍起にならなくていいんです。よりよく生きよう、より自分をレベルアップしよう、向上させよう。そんな事はもうどうだっていいんです。いつまでもそういう状態では満たされません。本当の自己実現など、あなたが生きている間には決して実現されません。むしろ私たちは自分から解放されて、自分を捨て、自分の十字架を負って、イエス・キリストについて行く者、従う者となって、キリストイメージを持った者に変えられたわけです。で、キリストイメージは私たちの働きではなくて、栄光から栄光へと、御霊による主の働きによって私たちはキリストと同じ姿に、キリストイメージに変えられていく。こんなに素晴らしい満たしはないわけです。自分以上の者になれるんです。キリストと同じ姿に変えられる。これは聖書の約束。これはあなたの働きではなくて、御霊なる主の働きだとパウロは言っています。人類の最高の理想になれるんです。あなたの理想じゃないんです。神の理想、神の望む姿、本来の姿。そこに私たちはゴールを置くことが出来ません。まあ、これがキリスト教の救いであります。心理学はそれを阻<sup>いば</sup>むもの、それをぶち壊すもの、台無しにしてしまうものです。自分で自分を修理する。自分で自分をベターにする。自分の力です。学問の力です。医療や科学の力によって、その実<sup>じつ</sup>を否定ことになります。私たちは神の御言葉の力、聖霊の力に信頼を置きます。神にしかできない御業を期待します。そうしない人たちはいつも学んでいます。熱心です。頑張っています。時間もお金も労力もかけています。でも真理を知ることが出来ずに、いつも縛られているんです。自分に縛られています。そのセミナーに、その教えに、そのグループに縛られています。実に不自由でしかありません。

で、今度はテキストに戻って頂いて**第二テモテ 3:8**『また、こういう人々は、ちょうどヤンネとヤンブレがモーセに逆らったように、真理に逆らうのです。彼らは知性の腐った、信仰の失格者です。』ヤンネとヤンブレ、この2人の名前はここにしか出てきませんが、モーセに逆らった人物として**出エジプト記 7:11**。ここにはヤンネとヤンブレの名前は出てきませんが、この2人が出てきます。『そこで、パロも知恵のある者と呪術者を呼び寄せた。これらのエジプトの呪法師たちも（この呪法師たちこそがヤンネとヤンブレです。）また彼らの秘術を使って、同じことをした。』“同じこと”というのは、モーセがアロンの杖を使ってその杖を蛇に変えたと同じことをして見せたわけです。彼らの秘術を使って、魔術を使って、呪術を使って、すなわち悪霊の力によって杖を蛇に変えて見せたと言っているわけです。で、その後たくさんの蛇が生じたんですが、アロンの杖から蛇になったその蛇が、すべての蛇を飲み込んでしまうということで、その力は歴然であったということが証明されます。同じ事を出来るんですけれども、でもその力の差は歴然である。サタンも悪魔も神と同じような奇跡の御業をやっているんです。やって見せます。病人が癒されましたとか、「これは奇跡だ、これは聖霊の力に違いない。」と私たちはすぐに騙されやすいかもしれませ

んが、気を付けて下さい。サタンも同じことが出来るんです。奇跡をやったのけるんです。だからすぐに吟味せずに鵜呑みにして飛びつかないで下さい。

で、このヤンネとヤンブレ。“ヤンネ”という名前の意味は「彼は苛立たせる。」とか「彼はうるさがらせる。」英語では He vexed.彼は苛立たせる、彼はうるさがらせる。まさにそういう人物です。また“ヤンブレ”という名前の意味は「泡立つ治癒者」英語では foamy healer.泡を立たせる癒やす者、治癒者。それがヤンブレの意味です。まさにヤンネとヤンブレ、名前の如く、苛立たせたり、うるさがらせたり、泡立つ（泡というのはまさに中身がないということです。）中身がないけど癒すような、そういうことをやってのけるわけです。で、彼らは“失格者”と言われています。8 節では『ヤンネとヤンブレはモーセに逆らったように、真理に逆らい、彼らは知性の腐った、信仰の失格者』と断じられています。同じようにモーセと全く同じような奇跡の御業をやったのけるんですけれども、彼らは失格者である。失格者は“無資格者”とも訳せます。教会の中で〇〇の神学校を卒業しました。牧師とか宣教師とか伝道者という肩書きを持っているかもしれません。でも実際に彼らは信仰の失格者である。無資格者である。第二テモテ 2 : 15 に使われている“熟練した者”の反対語なんです。反意語がこの“失格者”です。第二テモテ 2 : 15 に『あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。』この“熟練した者”の反対語が失格者です。で、彼らはもちろん反対のことをするわけです。真理のみことばをまっすぐに説き明かす事はしません。まっすぐどころかカーブして、曲げて、捻じ曲げて、曲解して説き明かすんです。で、“恥じることのない働き人”どころか、恥をかく働き人です。実際にヤンネとヤンブレも恥をかくわけです。そのために自分をささげるよう努め励む、神の言葉を献身して学ぶ。そのために努め励んでいる者ではありません。反対の者です。そういう資格のない者、失格者です。それがヤンネとヤンブレ。テトス 1 : 16 にも同じ言葉が使われていて、そこでは“不適格”という言葉で訳されています。（『彼らは、神を知っていると口では言いますが、行ないでは否定しています。実に忌まわしく、不従順で、どんな良いわざにも不適格です。』）教会の中にもヤンネとヤンブレのような不適格な者、無資格の者、熟練していない、御言葉をまっすぐではなくて捻じ曲げて説き明かし、恥じるような働き人が横行するんだということです。

で、テキストの第二テモテ 3 : 9 には『でも、彼らはもうこれ以上に進むことはできません。彼らの愚かさは、あのふたりのばあいのように（ヤンネとヤンブレのように）、すべての人にはっきりわかるからです。』ヤンネとヤンブレはモーセの真似をして見せたわけです。同じことをやってのけたわけです。でも彼らのやっていることは実に愚かしい行為だったということを出して下さい。最初アロンの杖は蛇に変わりました。で、彼らも、ヤンネとヤンブレも二人で、最低二人です。杖を蛇に変えたわけですから、蛇がそこに 3 匹生まれたわけです。ただでさえ蛇が 1 匹いるだけでも脅威なのに、また増やしてしまったわけです。愚かです。で、その後モーセはナイル川を血に変えたわけです。で、ナイル川の魚もみんな死んで腐敗臭が、悪臭があらこちらに立ち込めて、もう居ても立っても居られない状況になったわけです。水も飲めなくなってしまったわけです。ナイル川だけではなくて、家の中の飲み水も全部血に変わって、飲み水すら失ってしまった。悪臭が絶えない。で、この 2 人の呪術者、呪法師たちも、ヤンネとヤンブレも、モーセと同じようにせっかく余っていた飲み水すらも血に変えてしまっ、まさに飲み水がもっとなくなってしまったわけです。悪臭がまさにまた増えたわけです。愚かでしかないわけです。で、その後には蛙が大発生します。モーセが神の命令通りにやったわけです。そこら中、蛙だらけ。家の中も蛙だらけ。食器棚にも蛙、布団の中にも蛙、もうあちこち蛙なわけです。で、この 2 人も、ヤンネとヤンブレも蛙を増やして見せたわけです。もう蛙は要らないはずなのに、彼らは同じことをして蛙をただ増やす、ただ状況を悪化させるだけのことをしたわけです。これが愚かだと言っているわけです。モーセの物真似が却って状況を悪化させるだけのもの、これが悪魔の愚かしさです。悪魔も神と同じことをやってのけますが、結

局は状況を悪化させることしか悪魔には出来ないわけです。で、パロは、エジプトの王ファラオはもう堪らず、モーセに「もう蛙は除いてくれ。」と、モーセとアロンに頭を下げてお願いしたわけです。それでもパロは頑なにモーセたちを行かせなかったわけです。そうすると今度は神はぶよを増やすようにと、モーセに命じたわけです。ぶよは大発生しました。ぶよはいろんな解釈があります。蠅であるとか、蚊であるとか、蜂であるとか。ただ人間にとってとても耐え難い、そんな虫が大発生したわけですがけれども、でもその時なぜか、どういうわけか、この2人ヤンネとヤンブレはモーセと同じようにぶよを増やす事は出来なかったんです。

ここでもう一度テキストに戻って頂いて、9節に『でも、彼らはもうこれ以上に進むことはできません。彼らの愚かさは、あのふたりのばあいのように、すべての人にはっきりわかるからです。』ヤンネとヤンブレが愚かだということは、もうすべての人にはっきりと分かったわけです。杖を蛇に変える。ナイル川の水を血に変える。蛙を大発生させる。ヤンネとヤンブレもやってのけたわけですが、ぶよは増やせませんでした。なぜですか、と思うかもしれませんが、それまでは神はモーセを通じてパロに対していちいち警告をしていたわけです。これからこういうことをするよ。これからああいうことになるよと。ところがぶよが発生するときには警告なしでした。突然やったんです。警告されれば、悪魔もサタンも聞いているので準備が出来るわけです。準備をして同じことをするんですが、いきなりやられたら、いきなりは出来ない。これがサタンの能力の足りなさ、限界ということです。神と同じことが出来るようなんですけれども、実はその力の差は歴然である。あらかじめ警告を聞いていれば準備して出来るんですが、突然は出来ない。神とは違うんです。神は無から創造出来る方。何も無いところから。サタンはそういう事は出来ないんです。同じことが出来るように思えるんですけれども、厳密には同じようには出来ないと。毎回毎回警告を与えていたんです。モーセに対してパロにこのことを言えと。でもぶよのときには、そのパロに言え、という警告なしでいきなりやったわけです。パロではなくて、アロンに言え、と言ってやったんです。出エジプト記 8:16 に書いてあります。(『主はモーセに仰せられた。「アロンに言え。あなたの杖を差し伸ばして、地のちりを打て。そうすれば、それはエジプトの全土で、ぶよとなるろう。』)ですからこのヤンネとヤンブレの愚かしさは、モーセと同じことを、神と同じ御業をやったのけるように、力あるものであるかのように見せかけるんですけれども、でも実際には状況を悪化させるだけ。そういう者が教会の中にもやって来るといふ事、知らなくてははいけません。彼らは真理に逆らう者で、彼らは知性の腐った、信仰の失格者です。ぱっと見では分からないかもしれませんが。奇跡を行なうから、癒すから、悪霊を追い出すから。イエスも言われました。「『主よ、主よ』と言う者がみな天の御国に入るのではなく、天におられるわたしの父のみこころを行う者が入るのです。」と。「でも主よ。私たちはあなたの名によって奇蹟を行ったではありませんか。イエスの名によって悪霊を追い出したではないですか。」と。でもイエスは「わたしはあなたがたのことを全然知らない。」とおっしゃるわけです。そういう者が教会の中にも入ってくる。“羊の皮を被った狼”とマタイ7章では言われています。「彼らの実をもって判断しなさい、判別しなさい。良い木は良い実をならせ、悪い木は悪い実をならせるから。」きっと明らかになる。すべての人に明らかになる、ということが言われています。

で、10節に目を移して頂いて『しかし、あなたは(テモテに対してパウロは)、私の教え、行動、計画、信仰、寛容、愛、忍耐に、』パウロがここで言わんとしていることは、「あなたは彼らを見てはいけない、見習ってはいけない。むしろ私を見なさい。私に倣いなさい。」と。度々パウロはこういうことを言います。第一コリント 11:1。参考までにお読みします。『私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください。』聖書を健全に正しく教える人は皆パウロと同じことが言えるはずであります。『私がキリストを見ならっているように、あなたがたも私を見ならってください。』牧師も言えなければいけませんし、クリスチャンの親も自分の子供にこのことを言えなくてははいけません。言えないならば、悔い改

めて下さい。実際に違った教えをしているヤンネとヤンブレのような人たちは、このことは言えなかったんです。彼らは胸を張って「私たちがキリストを見ならっているように、あなた方も私たちを見ならいなさい。」とは、ヤンネとヤンブレのようなこの偽教師たちはとても言えなかったんです。なぜならば彼らはキリストのようでないからです。キリストとは似ても似つかないからです。キリストは自分を愛することなど絶対にしなかった、ということをお話しました。キリストはむしろ私たちのために自分を捨てたんです。自分の十字架を負ったんです。それが私たちのキリストです。自分を愛するとは正反対のことをなされたお方。快樂を愛するよりも神を愛することを選ばれた方。偽教師たちは、神よりも快樂を愛するということを選ぶわけです。十字架にかかって苦しみ、辱められ、痛みを負うことは、天の父の御心になうことであります。快樂を愛するなら、十字架に掛かることもせず、掛かったとしてもそこから降りることを選んだはずです。楽な方、楽な方。自分を生かす方を選んだはずです。でもイエスは自分を生かすよりも、私たちを生かすことを選ばれたんです。だから十字架の上から降りることができたのに、降りなかったんです。釘がイエスを十字架に止めたのではなく、私たちへの愛がイエス・キリストを十字架の上に止めたということは、皆さんにも何度もお伝えしている通りであります。ですからキリストを見習って私たちは生きる時に、「私のように生きなさい。」と。その時私たちはまさにパウロのような、またはテモテのような神の人になれるわけです。そうでないならば、悔い改めなければいけません。“**教え**”これはもちろん聖書の教理です。“**教え**”という言葉は、“**教理**”と訳せます。“**行動**”という言葉、これは直訳すると「導き、指導、振る舞い」。パウロの教え、パウロの行動、パウロの生き様。ただの教えだけじゃなくて、ちゃんとパウロの行動も見習うように。「言ってることとやってることが違うじゃないか。教えてることと振舞ってることが違うじゃないか。」ということがないわけです。言行一致ということです。また“**計画**”、これは“**目的**”と訳せる言葉。“**信仰**”、説明は不要だと思います。『寛容、愛、忍耐』、**第一コリント 13 章**では、愛の中には寛容も忍耐も含まれています。また**ガラテヤ 5 章**の御霊の実、単数形のひとつの実。これも愛という実の中に、やはり寛容が含まれています。特に“**寛容**”という言葉は、人に対して耐えるという事。“**忍耐**”という言葉は、状況に対して耐えること。類義語でありますけれども、“**寛容**”は特に人に対して、“**忍耐**”は状況に対して耐えるという違いがあります。でも、とりわけミニストリーというものの、神の働き、教会の務めには、この寛容さが欠かせません。人に対する忍耐と言ってもいいかもしれませんが、で、忍耐は状況、状況はいつも楽ではありません。逆風が吹く時もあります。逆境の時もあるわけです。それにも耐えなくてははいけません。パウロは身をもって模範を示したわけです。ですからパウロは、私の生き様、私の普段の教え、普段の行動、それに見習うように見本を見せているわけです。これはクリスチャン指導者の特長です。なぜならば、私たちの主が同じことをされたからです。「互いに仕え合いなさい。」口先だけではなく、イエス自らがしもべの姿をとって弟子たちの汚い足を洗われたわけです。奴隷のなかの奴隷の仕事自ら率先して示した上で、「互いに仕え合いなさい。」と教えたわけです。パウロも自らの模範を示して「この通りにしなさい。これが神の人の姿。これが神の働きである。」と。

そして **11 節**には『またアンテオケ、イコニウム、ルステラで私にふりかかった迫害や苦難にも、よくついて来てくれました。何というひどい迫害に私は耐えて来たことでしょうか。しかし、主はいっさいのことから私を救い出してくださいました。』

アンテオケでパウロは追放されました。使徒 **13 : 50**（ところが、ユダヤ人たちは、神を敬う貴婦人たちや町の有力者たちを扇動して、パウロとバルナバを迫害させ、ふたりをその地方から追い出した。』）

イコニウムではパウロは私刑、リンチに遭いました。使徒 **14 : 5 ~ 6**（『<sup>5</sup> 異邦人とユダヤ人が彼らの指導者たちと一しょになって、使徒たちをはずかしめて、石打ちにしようとして企てたとき、<sup>6</sup> ふたりはそれを知って、ルカオニヤの町であるルステラとデルベ、およびその付近の地方に難を避け、』）

ルステラではパウロは石打ちの刑で殺されたんです。一旦パウロは死んだんです。死んだので町の外に

捨てられたわけです。でもパウロはその時に第3の天にまで引き上げられて、プチ携挙されたんです。携挙されてまた戻ってきたんです。これは特異な体験です。パウロがコリントの手紙で言及しています。そのことは使徒14:19に言及されます。(『ところが、アンテオケとイコニウムからユダヤ人たちが来て、群衆を抱き込み、パウロを石打ちにし、死んだものと思って、町の外に引きずり出した。』)

また、『私にふりかかった迫害や苦難』原語では複数形です。数々の迫害、苦難。それらについては第二コリント11:22~33にまとめられています。長い箇所なので読み上げませんが、一部抜粋して読みます。

『<sup>23</sup> 私の労苦は彼らよりも多く、牢に入れられたことも多く、また、むち打たれたことは数えきれず、死に直面したこともしばしばでした。<sup>24</sup> ユダヤ人から三十九のむちを受けたことが五度、<sup>25</sup> むちで打たれたことが三度、石で打たれたことが一度(これがルステラのことです。)、難船したことが三度あり、一昼夜、海上を漂ったこともあります。<sup>26</sup> 幾度も旅をし、川の難、盗賊の難、同国民から受ける難、異邦人から受ける難、都市の難、荒野の難、海上の難、にせ兄弟の難(ノンクリスチャンから受けた難)に会い、<sup>27</sup> 労し苦しみ、たびたび眠られぬ夜を過ごし、飢え渴き、しばしば食べ物もなく、寒さに凍え、裸でいたこともありました。<sup>28</sup> このような外から来ることのほかに、日々私に押しかかるすべての教会への心づかいがあります。』抜粋して読みました。

まさに千辛万苦せんしんばんくというものです。苦難、迫害の連続です。波瀾万丈の人生。それでもパウロは、『主はいつさいのことから私を救い出してくださいました。』自分が頑張ったんじゃない。自分が歯を食い縛って我慢してきた、だから乗り越えられたんじゃない。主がいつさいのことからパウロを救い出して下さった。主が救出して下さいなければ、パウロはとっくに投げ出していた。とっくに絶望し、逃亡し、敗残兵となっていたのかもしれない。もちろん殺されることもありました。主が死からも救い出し下さったわけです。「主がどんなことをしてくださったのか、どんな力で自分自身にその御業を現してくださったのか。そのことをテモテよ、あなたは1番身近で見えていたではないか。だからヤンネとヤンブレのような偽教師たちが違った教えをして、奇蹟の御業を行って、パウロが病人を癒したようなことも彼らはやったかもしれませんが。でもそんなものにたぶらかされてはいけない。多くの女性信者たちが彼らになびいて、教会が分裂していくかもしれない。人気はそちらへ傾いているかもしれない。でもあなたは忠実に私の教え、私の行動、私がどんな働きをしてきたのか、生き様を見てこれに倣いなさい。」最後のメッセージです。

『よくついて来てくれました。』とパウロは言っていますが、「つき従う」という言葉です。同じ言葉が第一テモテ4:6に使われています。『これらのことを兄弟たちに教えるなら、あなたはキリスト・イエスのりっぱな奉仕者になります。信仰のことばと、あなたが従って来た(この“従って来た”というところが“よくついて来てくれた”と同じ言葉です。)良い教えのことばとによって養われているからです。』私たちもパウロの教え、すなわち新約聖書の教えに従うならば、テモテのようになります。

まずは“**教え**”がトップに挙げられています。間違った教えは、間違った行動を生み出してしまいます。正しい教えならば、正しい行動へ私たちを導きます。ですから、まず起点として、“**教え**”にしっかりと心を留めて頂いて、どういう教えを今皆さんは聞いているのか、学んでいるのか、しっかりと聖書で吟味して下さい。私の言うことも全て聖書と照らし合わせて、果たして聖書に書かれているかどうか、真理かどうか、十分に検証し吟味した上で、それを鵜呑みにしないで、「ここに書いてある。だからこれは神の言葉である。神の教えである。これは神の御心である。これは正しい健全な教理である。」と納得して自分のものとして頂きたいと思います。牧師が言ったから、じゃないんです。「牧師が言ったこともここに書いてあるから、私はこれを信じているんです。」と。カズが言ったから、じゃないんです。〇〇先生が、有名なあの人が、本に書いてあることだから、じゃないんです。聖書が私たちの教えであります。これから私たちはスタートしなくてはなりません。

で、12節に目を移して下さい。『確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者はみな、

迫害を受けます。』ここに皆さんは、自分の聖書に印を付けているでしょうか。線を引いているでしょうか。あまり不人気かもしれません。他のところは結構線を引いているかもしれません。自分にとって都合のいいところは、バッチリ線を引いているかもしれませんが、この**第二テモテ 3:12** はあまり人気がありません。でも、これも約束なんです。「確かに、キリスト・イエスにあって敬虔に生きる者」じゃなくて「**生きようと願う者**」です。もう願うだけであなたはそこから迫害に遭うという約束です。ですから、クリスチャンとして迫害に遭っている者は幸いです。なぜならば、その人はキリスト・イエスにあって敬虔に生きようと、もう願っているから。敬虔に生きている人も迫害を受けますが、願うだけでも迫害に遭っているわけです。「私はクリスチャンですけれども特別迫害に遭ったことはありません。」という人は、キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願ったこともない人です。ですから、悔い改めて下さい。「まだ1度も迫害を受けたことはありません。」ヨハネの福音書 15:20『しもべはその主人にまさるものではない、とわたしがあなたがたに言ったことばを覚えておきなさい。(イエスが弟子たちに言っています。)もし人々がわたしを迫害したなら、あなたがたをも迫害します。もし彼らがわたしのことばを守ったなら、あなたがたのことばをも守ります。』もし私たちがイエスを主として自らを主のしもべとするならば、主が迫害されたわけですから、しもべも迫害されることを覚悟しなければいけません。「迫害は嫌だ。」と言う人は、イエスのしもべではありません。キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願ってもない人です。

また、**マタイの5章**の、『**山上の垂訓**』、これは『**八福の教え**』に含まれています。**マタイ 5:10**から読みますから聞いて下さい。『<sup>10</sup>義のために迫害されている者は幸いです。天の御国はその人たちのものだから。<sup>11</sup>わたしのために人々があなたがたをののしり、迫害し、ありもしないことで悪口を浴びせるとき、あなたがたは幸いです。<sup>12</sup>喜びなさい。喜びおどきなさい。天ではあなたがたの報いは大きいから。あなたがたより前にいた預言者たちを、人々はそのように迫害したのです。』もしあなたがイエスの御名のゆえに迫害されているならば、あなたは天において間違いなく報われる者だということを知って下さい。だから喜び踊って下さい。迫害が怖い、辛い、痛い、苦しい、恐ろしい、と思わないで下さい。迫害されたら、その場でもう喜び踊って下さい。きっと周りの人は気でも狂ったのかと思うかもしれませんが、幸いだと言われています。ハッピーだと言われているんです。これでようやく私も晴れてキリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願っていることが証明されました。少なくとも願っているということが証明されました。そして報いが天にあるということが確信されました。幸いだな、と思っして下さい。認められたと思っして下さい。パウロのように、テモテのように、神の人という承認を受けたというふうに思っして下さい。キリストの弟子、キリストの使徒の仲間入りを果たしたと思っ、喜び踊って頂きたいと思います。もし未だ迫害を受けたことがないと思うならば、今から敬虔に生きようと願っってみて下さい。早速今晚から迫害があるかもしれませんが、遅かれ早かれキリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願っっている者には迫害があります。「もうキリストの名前なんか、二度と口にするな。聞きたくない。聖書の御言葉なんかやめてくれ。聖書を寄越したけど、こんなモノ要らない。迷惑だ。返すよ。」クリスチャンたちを馬鹿にし、そしてクリスチャンたちの信仰を狂信的だと言う、気が狂っていると言う、カルトだと言う、異端だと言う、頭がおかしい連中だ。そのように言われたことがないならば、あなたは本当の意味ではまだ救われていないのかもしれませんが。クリスチャンと言う呼び名自体が、キリストきちがいという意味なんです。アンテオケという所でノンクリスチャンがキリスト信者たちを“クリスティアノス”つまりクリスチャンと呼んだわけです。ノンクリスチャンがキリストを信じる者をクリスチャンと呼んだんです。なぜならば、彼らは朝から晩までキリストことばかり言っている。何かと言えばキリスト。何でもキリストに結びつける。だからキリストきちがい、キリスト馬鹿、クリスティアノス、クリスチャンと呼んだわけです。今日クリスチャンという響きは聖人君子のように聞こえるかもしれませんが、とんでもないですね。本来は差別用語です。まさにヘイトスピーチだったんです。キリストきちがい、キリスト馬鹿、キリスト狂いのキ

リスト狂徒、それがクリスチャンという意味です。ですから自らクリスチャンと名乗らなくても、人はすぐ言うんです。「ああ、あの人はクリスチャン。だって朝から晩までキリストの事ばかり言っているから間違いない。」自分でクリスチャンだと言わなくても、普段からキリストの名を出していますから、名乗るまでもないわけです。で、キリストきちがいだということはノンクリスチャンが証明してくれるわけです。で、当然あなたは迫害を受けているわけです。で、パウロはテモテにそのことを望んでいます。テモテはどちらかというと気弱だったということを言いました。臆病になってしまう。だからこの手紙の冒頭では、**第二テモテ 1:7**に『**神が私たちに与えてくださったものは、おくびょうの霊ではなく、力と（デュナミス）愛（アガペー）と慎み（セルフコントロール）との霊です。**』ですから迫害を受けても臆病になってはいけない、恥ずかしがってはいけない、躊躇しても迷っても逃げてはいけないし、恐れてはいけない。堂々としなさい。

そして**13節**。『**しかし、悪人や詐欺師たちは、だましたりだまされたりしながら、ますます悪に落ちて行くのです。**』これが違ったことを教える、非聖書的な教え、異端的な教えを説く偽教師たちのなれの果てです。彼らは悪人、詐欺師と呼ばれていますが、だましたりだまされたりしながら、ますます悪に落ちて行く。その結末、その顛末は破滅であります。だから動じる必要はありません。今は一世風靡をしているかもしれませんが、彼らは人気取りで、まさにその教えが教会の中にも蔓延しているかもしれません。ベストセラーに彼らの教えがなっているかもしれません。超有名になって、あちこち大きな集会を開いて、何百人何千人を集めているかもしれません。巨大な教会の牧会をしているかもしれません。でも、最後は落ちていくということです。

で、**14節**に『**けれどもあなたは（テモテは）、学んで確信したところにとどまっていなさい。あなたは自分が、どの人たちからそれを学んだかを知っており、**』テモテはいろんな人たちから、“どの人たちから”と複数形です。まずこの手紙の頭に挙げられていたテモテの祖母ロイス、そしてお母さんのユニケ。この二人からまずは聖書を学んでいたわけです。幼い頃から。**15節**にも『**幼いころから聖書に親しんで来た**』とあります。もちろんお母さんとお婆ちゃんだけじゃなくて、パウロからもテモテは学んでいたわけです。テモテはパウロを自分の父として慕っていたわけですが、パウロ自身も「わが子よ」とテモテのことを霊の父として愛したわけです。少なくともお婆ちゃん、お母さん、そして霊の父パウロからは聖書を学んでいたわけですが、その他の人たちからも（複数形ですね。）学んでいたと思われまます。パウロの同労者たち、テモテの先輩もいっぱいいたわけですから、そうした複数の人たちから学んでいたと思われまます。で、このことは皆さんにもお勧めしたいと思います。この教会には牧師の私1人ですけれども、皆さんはたくさんの聖書教師、牧師たちからも学ぶことができます。いろんな人たちのメッセージを聞くことができます。幸い今日は情報化社会ですから、インターネットを通じても聞けますし、またいろいろな媒体を通じてメッセージが録音されていれば、それも聴くこともできます。CDやDVDになっているものもあるでしょうし、また本という媒体もあります。いろんなお勧めの本、推薦図書、必読書というものも複数私は皆さんに紹介しています。MGFメンバーの必読書。その壁にも貼ってあります。メンバーならば全員間違いなく読んで欲しいというものを挙げています。それもたくさんの人たちから学ぶということが出来るわけです。私もたくさんの人たちから学んできました。私の牧師はカルバリーチャペルの創立者のチャック・スミスですが、チャック・スミスだけが私の先生ではありません。他にもたくさんの人たちから学んでいます。古くはもちろんマルティン・ルターという宗教改革者ですけれども、カルバンもそうですし、また聖書教師、特に公開説教の名手と呼ばれる人たち、マシュー・ヘンリー（日本語にもなっています。）とかチャールズ・ハドン・スポルジョン（私の師匠です。）、D・M・ロイドジョーンズとか、枚挙に暇がありませんけれども、今日ではウォーレン・ウエスビーといった聖書教師たち。私がこのメッセージをするにあたっては、そうした人たちの著作を最低でも10冊は参考にして、そこから解釈を確認し、皆さんに教えて

いるんです。最低 10 人から学んで教えているんですけれども、それは最低ということです。私はそのようにバイブルカレッジで学んできました。ペーパーと呼ばれる論文を書くのに、少なくとも 10 冊以上の注解書を用意して、そこでそれぞれの聖書箇所を解釈を読んで、そしてそこからあなたは書くように。で、そこから 1 番重要になるのは適用だと、アプリケーションだと言われて教わりました。皆さんも同じようにして学んで頂きたいと思います。私だけではなくて、たくさんの人たちのメッセージ、たくさんの著作、バランスを持って頂きたいと思います。たった 1 人のメッセージだけを聞いて、そこだけに凝り固まる。非常に危険だということです。カルトの教祖、「彼の言う事は神の言うことである。彼以外の言うことは皆間違いである。この教会だけが神の教会。この教会以外では救われぬ。」そういうことを言い出したら、気を付けて下さい。そこは異端的な教えをするグループです。「その教祖が絶対である。その教祖の教えは神の教え。他の教会へは行ってはいけない。他のメッセージを聞いてはいけない。他の本は読んではいけない。」そういうことを言い出したら、そこはもうカルトだと思って頂きたいと思います。

で、次にテキストに戻って頂いて 15 節『また、幼いころから聖書に親しんで来たことを知っているからです。(テモテは幼い頃から祖母のロイス、母のユニケから教わってきたわけです。) 聖書はあなたに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることができるのです。』“聖書は”というのは旧約聖書のことを指します。新約聖書の中に“聖書”という言葉が出てきたら、それはすべてまず第一義的には旧約聖書を指します。と言うのは、まだ新約聖書は完成していないからです。旧約の 39 巻を特に指しています。で、その旧約聖書中にイエス・キリストに対する信仰による救いを受けさせる力があるということを皆さんに知って頂きたいと思います。旧約聖書だけでイエス・キリストを信じる救いを与えると言うことです。「私は旧約聖書なんかあまり読みません。難しいし、よく分からないし、あまり現代風には読めないから。新約聖書の方が読みやすいし、分かりやすいし。」つつい旧約を敬遠してしまうかもしれません。でも、旧約聖書だけでイエス・キリストに対する信仰による救いを受けさせることができるということをパウロは言っているわけです。そのように旧約聖書を皆さんは読んでいるのでしょうか。ヨハネ 5:39 イエスの言葉です。『あなたがたは、聖書の中に(旧約聖書の中に)永遠のいのちがあると思うので、聖書を調べています。(旧約聖書を調べています。) その聖書が、わたしについて証言しているのです。』旧約聖書はイエス・キリストについて証言しているキリストの証言集です。テーマはイエス・キリストです。創世記からマラキ書まで、39 巻すべてイエス・キリストをテーマとしています。ちなみに MGF のホームページには聖書 66 巻に見るイエス・キリストの姿をリストアップしていますから、創世記に出てくるイエス・キリストから始まって、黙示録のキリストまで全部挙げていますので参考にして頂きたいと思います。

で、宗教改革者のルター、ドイツの人です。彼の言葉も併せて紹介します。『聖書はその中にキリストが横たわっている飼葉桶である。母親が赤ん坊を見出すだけの目的でゆりかごに行くように、私たちはキリストを見出すだけの目的で聖書を読むべきだ。』“キリストを見出すだけの目的で聖書を読むべきだ。”これが健全なクリスチャンの聖書の読み方です、学び方です。あなたは聖書を何のために開くのでしょうか。自分のニーズを満たすため、自分の悩みに応えてもらうため。自分の、自分の、自分の。それは自分を愛する者の読み方です。そうではなくて、もう自分は追いやって、どっかに置いておいて、自分のじゃなくて、キリストです。それが健全な聖書の読み方です。「聖書が分かりません。」と言う人は、大体自分のことを考えて読むからです。自分の答えを探そうとするからです。自分にとって都合のいい事を、気ままに願いを持って聖書を開くから、だから分いつまでもからないんです。難しいと言うんです。でも、一度<sup>ひとたび</sup>キリストを見出すだけの目的で、ルターが言うように読み始めるならば、あなたの目は開かれます。

同じく宗教改革者のジャン・カルバン、フランスの人です。彼はこう言いました。『我々は聖書を読む時、その中にキリストを見出そうという意図を持って読まなければならない。』“読まなければならない。”と語っています。

また、このルター、カルバンは16世紀の人ですが、18世紀のイギリスのメソジストのリバイバリスト、福音主義の父の1人と称されるジョージ・ホイットフィールドという人の言葉も紹介します。彼によると『イエス・キリストは聖書の中に隠されている宝物です。ですから聖書はイエスキリストを見つけるために読まなければなりません。』

皆偉大な聖徒たちは異口同音に「聖書はイエス・キリストを見出すために読まなければいけない。」と言っています。これがクリスチャンの聖書の読み方です。今まで間違った読み方をしていたならば、今日から正しい読み方をして下さい。今日バイブルスタディーにあなたは何のために来たんですか。悩みを解決するために来たんですか。耳障りのいい事を聞くために来たんですか。そうじゃないはずです。キリストを知るために来たはずです。

で、もうひとつ15節で興味深い言葉として“幼いころから”という言葉に注目して下さい。“幼いころ”という言葉はギリシャ語で“ブレフォース” brephos と言います。この言葉は「赤ちゃん、乳児、幼児」を指す言葉です。新生児もです。またさらに<sup>さかのぼ</sup>遡って胎児（受胎後3ヶ月）、またさらに遡って胎児の前の胎芽（受胎後8週）、これも指す言葉です。胎芽（約2ヶ月）、そして胎児（約3ヶ月）、生まれてきたばかりの乳飲み子も、新生児も、そして幼児も皆含めた言葉が“ブレフォース”です。実際にこの“ブレフォース”はルカ1:41~42。エリサベツのお腹の中にいる胎児のヨハネ、約6ヶ月です。そのヨハネに使われています。またルカ2:12,16に<sup>みどりご</sup>嬰兒イエスについて使われています。生まれたばかりの嬰兒、これも“ブレフォース”。第一ペテロ2:2『生まれたばかりの乳飲み子のように、純粋な、みことばの乳を慕い求めなさい。』その“生まれたばかりの乳飲み子”という言葉も“ブレフォース”であります。またルカ18:15イエスのもとに来た幼子たち。弟子たちは子どもが邪魔をしに来たと思って子供を叱り付けたわけですが、でもイエスは弟子たちをたしなめて、逆にこの幼子たちを抱き上げて祝福して、この幼子のような信仰でないといけないということを教えられたわけですが、イエスは幼子をこよなく愛しました。それも“ブレフォース”です。ですから、テモテが“幼いころから”というのは、一体どの段階からか。“ブレフォース”という言葉だけをとるならば、もう既に胎芽の状態から（受胎後2ヶ月）、そして胎児（受胎後3ヶ月）、生まれてから言葉も発しないその時点でも、そして幼い子供、幼児の時も。おそらくはテモテはお婆ちゃんのロイス、母のユニケから聖書を学んでいて、もう既にお腹の中にいた時から、いわゆる胎教を施されていたと思われます。胎教という言葉も、最近はもうよく使わなくなったそうですけれども、その信憑性も疑われたりしますが、だいたい妊娠5ヶ月ぐらいから胎児の聴覚が発育発達してくるわけです。ですからそのぐらいから胎教というものを始めるそうです。モーツァルトの音楽を聴かせるとか。実際にはお母さんの声しか聞こえないとも言われてますけれども。でも、実際に神の言葉は耳から入るんじゃないんです。神の言葉は魂に、その霊に直接語りかけますから、胎芽の時点からでもいいんです。もっと言えばその前から、受精した時点からでもいいぐらいです。まあ、すぐに妊娠したかどうかは判らないかもしれませんが。発覚したら、もうその時点から胎教を始めていいんです。すべきなんです。神の言葉を教えるべきなんです。クリスチャンは絶対にこのチャンスを逃してはいけません。胎教、御言葉をもってお母さんが声を出して読み上げる時、聴覚が発達する前から神の言葉は生きていて力があります。ですから魂に直接語られます。病人でも、瀕死の状態でもう意識がありません。医者はそう言います。何を言っても聞こえませんよと言うかもしれませんが。でも実際には御言葉を語れば、御言葉その人の心に届いているんです。そういう例を私はこれまで何回も見てきました。神の言葉には力があるんです。ですから胎教という言葉があるならば、それはクリスチャンにおいて、聖書を教える者において与えられている言葉だと思って下さい。バプテスマのヨハネはお腹にいた時からイエス・キリストに会って、受胎したばかりの母マリヤのその胎に宿ったその命に対して、喜び賛美を表現していたわけです。もう既に胎児はお腹の中でイエス・キリストをほめたたえることが出来るんです。

また、**士師記 13 : 2 ~5** も是非参考にして下さい。サムソンのお母さんとお父さんに対して主の使いが命令しました。主の使いというのは実は受肉前のキリストのことなのですが、そこでの胎教はナジル人の誓いを果たす上で既にもうサムソンは生まれる前から、お母さんのお腹の中にいるときから、強いぶどう酒を飲んではいけない、もう食べ物についても注意しているわけです。これも胎教です。ただ聖書の言葉を教えるだけじゃなくて、妊娠中にはアルコールを摂取しない。有害なもの、ニコチンもそうですし、麻薬だとかもっての外ほかですけれども。クリスチャンはそのようにして食べ物についても気をつけながら、そして霊の養いも、神の口から出る一つ一つの言葉、これも人を生かすわけですから、霊肉ともにもう胎教を始めるわけです。体育というものを始めるわけです。ちなみに日本では妊娠 21 週目までは人間とはみなされず、中絶が OK とされています。21 週以内は人間じゃない、殺していいと言ってるわけです。でも**詩篇 139 : 16**。そこに胎児という言葉が使われています。旧約聖書ですからヘブル語で書かれています。“ゴレム” golem という言葉です。それは「胎芽、胎児」という言葉です。神様が認めているもの、神様がつくられた命です。それを人間の都合で殺してはいけません。その時から私たちは神の言葉を教えることが出来ます。クリスチャンファミリーには是非この事を強く求めたいと思います。まだ結婚していない独身の人たちに、結婚して命を授かったら胎教を始めて下さい。もう生まれる前から毎日聖書の言葉を読み聞かせてあげて下さい。そしてテモテのような神の人を産んでもらいたいと思います。

で、**16 節**。『**聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。**』神の言葉は聖書です。それは神の靈感によって書かれています。“**神の靈感**”という言葉は直訳すると“神の息吹”です。アダムにも土地の塵で造られた段階では命がなかったんですが、そのアダムに神の息が吹き込まれて、アダムは生きたものとなったと言われています。神の息吹、それは神の霊です。霊という言葉は「息、風」とも訳せます。ギリシャ語では“プニューマ”、ヘブル語では“ルーハ”と言います。全部ヘブル語もギリシャ語も、同じく“霊”も、“息吹”も、そして“風”も指す言葉です。神の息吹が吹き込まれ、神の霊が吹き込まれた言葉、それが聖書です。**第二ペテロ 1 : 20~21** も参考に読みたいと思います。『<sup>20</sup> それには何よりも次のことを知っていなければいけません。すなわち、聖書の預言はみな、人の私的解釈を施してはならない、ということです。<sup>21</sup> なぜなら、預言は決して人間の意志によってもたらされたのではなく、聖霊に動かされた人たちが、神からのことばを語ったのだからです。』これも神の靈感を説明する箇所であります。聖書は聖霊によって書かれたと。ですから聖書は聖霊によって理解されなければいけません。ノンクリスチャンは聖書を読むことはできますが、聖書を理解することは出来ません。ノンクリスチャンには聖書を解釈する能力はないんです。イエス・キリストを信じた者は、神の息吹が吹き込まれた者。イエスがニコデモに対して**ヨハネの福音書 3 章**で風の話をしました。風は思いのままに吹くと。それは聖霊のことであるわけです。そのように神の霊が、神の息吹が、神の風が吹きこむと人は救われるわけです。目に見えないわけですが、風が吹けば木々が揺れるように、私たちの内にも変化が起きるわけです。そのようにイエス・キリストを信じた者には聖霊が宿り、内住の聖霊が聖霊によって書かれた神の言葉を教えてくれるわけです。聖霊は私たちの教師となるわけです。聖霊の解明によらなければ聖書を理解することは出来ないというのが、私たちの信じているところでもあります。ですから、ノンクリスチャンにいくら聖書読んで理解せよ、と言ってもそれは無理な話です。でも解き明かしがある時、解き明かしは聖霊の賜物を受けた私のような牧師が解き明かすので、そこで初めて目が開かれるわけです。そこで聖書の言葉を通してイエス・キリストを知ることが出来、そしてイエスを信じる事が出来るわけです。そこに聖霊が働くからであります。だからひとりで読んでいても分からないのは当然であります。

で、ただし、クリスチャンと呼ばれる人たちの中にも、聖書の言葉が全て神の靈感によるものだと思っていない、信じていない人たちがいるのを皆さんは知っているでしょうか。残念なことですけれども、そういう人たちが多いです。特にこの日本では、プロテスタントの中には神の靈感を信じていない人たち

があります。聖書はすべて、と言われていますが、すべてじゃなくて一部分だけ靈感によって書かれている。断片的に靈感によって書かれている。でも他は人間が書いたもの、人間が編纂したもの、人間の創作である。創世記などはそれはただの神話である。だから寓話的に解釈すべきだ。モーセ五書、それはモーセ五書と呼ばれているけれどもモーセが書いたわけではない。ノンクリスチャンがそう言うのは当たり前です。でもクリスチャンと呼ばれる人たちがそう言うんです。そういう人たちの事を自由主義神学者と言います。リベラルと言います。聖書をそのように人間が勝手に解釈する。どの部分が聖霊によって書かれたもので、どの部分が人間によって書かれたものか、勝手に自分たちで、人間が主体となって分別する。そういう学問のことを高等批評とも言います。で、そのような立場が日本では実は主流なんです。日本の最大の教派、それは日本基督教団と言いますが、その日本基督教団は皆、自由主義神学、高等批評の立場です。最大のグループです。ルター派のルーテルも、その他の聖公会とか、主流派と呼ばれるグループは皆リベラル、自由主義、高等批評の立場です。すなわち、聖書はすべて神の靈感によって書かれてはいない、という立場です。部分的に、断片的には認めます。すべて神の靈感によって書かれたという立場は、福音主義とも言います。福音派と言います。ただ残念ながら福音派の中にも自由主義神学の者があります。逆に日本基督教団の中にも福音派の人もおります。ですから、団体名とか教団名だけでは一括りには出来ないところもありますけれども、人間の作であるならば聖書の中にも誤りがあると、彼らは考えます。だから聖書は絶対的な基準にはなり得ない。でも、聖書はすべて神の靈感によるとするならば、神は誤ることのない方、間違えることのない、失敗も罪も犯さない方ですから、誤ることのない神が書いた誤ることのない言葉ですから、聖書は絶対的な基準となるわけです。最終権威となるわけです。それが福音派と呼ばれる人たちの立場です。なんだかんだ言って、全て聖書で判断する。聖書が最終的な判断基準となる。でも、リベラルの人たちはそうは考えません。聖書は二の次、三の次。人間の考えが先に行くわけです。聖書は参考までに。聖書の中にも間違いはあるんだから、だから聖書はそんな最終権威にはなり得ない、という立場です。

実際にこの教会は聖書をすべて神の靈感によって書かれたものだと信じて、ひとつの誤りもない神の言葉だと信じています。逐語靈感説と言うものです。また、聖書の記述も間違いがない。厳密に言うならば、原典において神の靈感によって誤りのない言葉として書かれたと言うことで、その原典は今日存在しませんから、写本において写本のミスがあったり、またそれらを日本語や他の言語に訳す段階でミスがある事は、これは認めます。日本語の聖書、この新改訳聖書にも間違いがある事は、これは否定しません。でも、原典においてはすべて神の靈感によって書かれた、パウロに神の息吹が吹き込まれて、パウロが人間ではあるけれども、でも聖霊によって守られながら過ちを犯さないで1つ1つの言葉が靈感によって書かれたということを私たちは信じています。実際に聖書は間違いのない神の言葉だということはいろんな形でも証明出来ます。聖書は、ここでは39巻の旧約聖書を言っていますが、新約の27巻、合わせて66巻を私は全て神の靈感によるものだと信じています。著者は40人以上。書いた人は、王様も農夫もあれば、漁師もあれば、また哲学者もあれば、学者もあれば、また取税人という税務署の職員もあれば。いろんな人たちが1600年もの時代を経て、60世代もの時代を経て書いたにもかかわらず、そこにはひとつのテーマが。歴史書もあれば、詩もあるんです。格言もあるんです。預言書もあるんです。でも、テーマはひとつだと。共通しているわけです。統一されているわけです。アジア大陸、アフリカ大陸、ヨーロッパ大陸、それぞれで描かれたんです。にもかかわらず内容は統一され調和している。そのような文書は1つありません。類を見ません。旧約はヘブル語、一部はアラム語。新約はギリシャ語で書かれております。また一部アラム語で書かれています。でも統一しているんです。また翻訳された初めての本でもあります。2009年現在は2,427言語に翻訳されています。またこの聖書は世界で初めて印刷された本でもあります。グーテンベルクの印刷機です。皆さんもよく知っていると思います。また、今日でもロングセラー、ベストセラー、

累計 3,880 億冊も（それ以上だと思われませんが）、聖書というものは印刷されてきました。非常にユニークなものです。神の言葉としか思えないものです。ですから、ルイス・シュペリセイファーという著名な神学者はこう言っています。「**聖書は書く力があつたとしても、書こうと思いつくような本ではなく、書こうとしても書き得ない書である。**」と。人間が書くなるととても不可能だと言っています。もちろん聖書の古さは他に類を見ません。世界最古のもので、写本のことをもちろん言っているんですけども、その写本の数は膨大なもので、他の古典、古文書などとはもう比較になりません。中でも 1 番有名なのは『死海文書』、死海で発見された世界最古の写本があります。それをもつても聖書は神の言葉だということは証明できます。書誌学とか文献学という分野です。また他にも統一性とか、調和性だけではなくて、また普及率もさることながら、迫害にも耐えてきた書です。クリスチャンたちは弾圧されてきました。聖書は焚書扱い。燃やされて、破棄されて、この世から抹殺されようとしたわけです。でも聖書はその迫害にも耐えてきたんです。新約聖書が完成されてから 2000 年も経ちましたが、2,000 年間滅ぼされる事はなかったわけです。またその影響力も計りしれないものがあります。当然この影響力は世界の文化に浸透しているわけですが、科学の分野でも、また芸術も文学もそうです。また音楽もそうです。「**靈感**」という言葉は英語では「インスピレーション」と言いますが、まさにそのインスピレーションを聖書は与えてきたわけです。医療の分野、福祉の分野、教育の分野もそうです。近代科学の父アイザック・ニュートンもこう言っています。「**いかなる世俗の歴史におけるよりも、聖書の中にはより確かな真理が存する。**」と。ニュートンも聖書の中により確かな真理が存する、と言っています。にもかかわらずクリスチャンと呼ばれる人たちでも、聖書はすべて神の靈感によっては書かれていない、神の言葉ではない、と言い張る人たちがあるわけです。聖書が神の靈感によるものでないならば、それは絶対的な基準、唯一の人生の規範になり得ないということ、私たちはこれに従う必要はないということを表明しているわけです。聖書に従う必要はない。聖書の言うことを聞く必要はないと。聖書は絶対的な権威にはなり得ないと表明しているわけです。そのような自由主義の立場の人たちは、聖書の縛りから自らを解放して、自らを神として自由に振る舞う人たちです。それはもはや私はクリスチャンとは呼べないと思っております。榎本保郎という日本基督教団では有名な、もちろんもう天に召された人ですが、ちいろば先生という人が、自由主義の日本基督教団にありながらこういうことを言っています。「**私たちが一旦聖書を神の言葉として認めたら、主従が逆転して私たちが神の言葉に従うしかない。私たちが御言葉を切り刻むのではなく、私たちが御言葉によって刻まれるべきなのだ。**」と。これが健全な聖書の取り扱いであります。聖書が私たちが切り刻むんです。人間が勝手に「ここは靈感によるもの。ここは靈感によらないもの。」と切り刻むべきものではない。人間が勝手に分析すべきものではないということです。チャールズ・ハドン・スポルジョンもこう言いました。「**私たちの聖書が消え失せたら、聖書を信じてはならないと教えられたら、一体どこに行けばよいのでしょうか。聖書のどの箇所が靈感を受けて書かれ、どこがそうではないと言うのなら、そんな疑いだらけの書物は聖書ではありません。**」その通りだと思います。自由主義神学の人たちが持っている聖書は、聖書じゃないんです。ただの人間の産物だという扱いです。ですから彼らは聖書を重要視しません。だから彼らは衰退するんです。それが事実です。それが実態です。自由主義神学の立場の人たちはどんどん衰退しています。彼らには力がないんです。見えるところは敬虔ですがその実を、その力を否定する者たちの部類に入るとかと思えます。

で、テキストに戻って頂いて**第二テモテ 3 : 16**です。もう一度読みたいと思います。『**聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。**』“**教え**”というのは正しいことを示すこと。また“**戒め**”というのは間違い、罪を示すこと。また“**矯正**”というのはどのようにして正しくなるか。また“**義の訓練**”とはどのようにして正しくあり続けるか、正しさを保つのかということです。そのために聖書は有益だと。正しいことを示す“**教え**”。間違い、罪を示す“**戒め**”。どのようにして

正しくなるか、“矯正”。どのようにして正しくあり続けるか、その正しさを保つのか、それが“義の訓練”です。このために必要だと言っています。

幼児教育の祖と呼ばれるドイツの教育学者のフリードリッヒ・フレーベル。フレーベルと言えば皆さん有名なので知っていると思います。牧師の息子です。幼稚園、“キンダーガーデン”の言葉を作った人です。“幼稚園”というのはその“キンダーガーデン”の訳語です。今日幼稚園と呼ばれるものはすべてフレーベルが作ったものです。で、その彼がこう言っています。「**聖書は私たちに最も善良な生活の仕方と、最も高尚な苦勞の仕方と、最も安全な最後の遂げ方を教えてくれる。**」至言だと思えます。その通りです。第二テモテ 3:16 を言い換えた言葉とも言えると思います。素晴らしい神の言葉です。他の人間の言葉では、人間の書物では、こうはいきません。それを幼児教育の祖と呼ばれるフレーベルが幼い子供たちに、もちろんこのことを強調したい事は言うまでもありません。テモテと同じように幼い頃から聖書に親しむという事、それが本来の幼稚園のあり方です。お寺の幼稚園は、幼稚園と名乗るべきではないと思えます。聖書を教えないからです。フレーベルの思想の表面だけ、良い所だけ取っていますけれども、その本質の、その核の部分は聖書にありますから、そこは彼らは知らないでいます。ですから最高の善良な生き方、最高の高尚な苦勞の仕方、最良の最後の死の遂げ方、そんな事は幼稚園では教わらないわけです。本来キリスト教系の幼稚園ならば、このことを教えるべきです。残念ながら自由主義の日本基督教団系とか聖公会の系統の幼稚園はいっぱいありますけれども、そこでは聖書はもちろん教えられますけれども、神の言葉としては教えられません。

で、最後 17 節。『それは、神の人が、すべての良い働きのためにふさわしい十分に整えられた者となるためです。』“神の人”テモテがそう呼ばれていました。第一テモテ 6:11 (『しかし、神の人よ。あなたは、これらのことを避け、正しさ、敬虔、信仰、愛、忍耐、柔和を熱心に求めなさい。』) 聖書の中で神の人と呼ばれる人は数少ないごく一握りだと言いました。その中にテモテが含まれているのは注目すべきだと言いました。でもここではもし私たちが神の言葉により頼むならば、私たちもまた神の人になれるということです。神の言葉が神の人を形成するんです。特にここで“**良い働きのためにふさわしい十分に整えられた**”とありますが、その“ふさわしい”というところは、神の働きのために「完成された」というのが直訳です。完成された者に十分に整えられる。ですから“完成”という言葉がこの中に含まれているんです。神の言葉が私たちを神の人として完成させるんです。それは何のため。良い働きをするため、とあります。“**良い働き**”という言葉は 2 章 21 節にも使われていました。『あらゆる**良いわざ**(良い働き)に間に合うものとなるのです。』“**良いわざ**”というのは“**良い働き**”という言葉です。また他にも第一テモテ 3:1。そこは『人がもし**監督の職につきたい**と思うなら、それは**すばらしい仕事**(良い働き)を求めることである。』“**素晴らしい仕事**”は“**良い働き**”というのが直訳です。監督とは、牧師のことです。牧師は良い働き。第一テモテ 2:10、5:10 にも使われています。それらに、**良い働き、良い行い、良い奉仕、素晴らしい仕事**、そうした言葉は全部同じ言葉です。使われています。

聖書は何のために学ぶのか。それはあなたが神の人として完成されるため。それはひいてはあなたが神の人として神の働きを担うためです。それが“**良い働き**”です。ここで皆さんが聖書学んでいるのは何のためか。あなたが神の人になるため。神の働きを担うためです。良い働きをするために。頭でっかちになるためじゃないです。良い働きをするためにあなた学んでいるんです。何もしなくていいんじゃないんです。ただ椅子に座って勉強してればいいんじゃないんです。良い働きをするためにここに集められています。そのために聖書を読むんです。ウィリアム・ティンデルという 16 世紀のイギリスの宗教改革者、英語の欽定訳聖書の元を作った人です。英語訳の聖書を初めて作った人です。彼は異端とみなされて火あぶりの刑で殺されました。そのウィリアム・ティンデルの言葉です。「**神の御言葉を読む人や、御言葉について論理的な説明や討論を聴く人は、誰でもすぐに毎日成長し始め、ついには完全な人になります。それが神**

の御言葉の特徴です。」その通りです。これが神の御言葉の特徴です。ティンデルも迫害されたんです。でも彼は御言葉によって完全な人になりました。彼の残した英訳の聖書は、後に世界のスタンダードになったわけです。

そして最後に私の牧師チャック・スミスの言葉を紹介します。「私たちは主イエスに対して心に決めて応答し、神の民に仕えるだけでなく、神の言葉に対しても心に決めて応答しなければなりません。聖書は神の靈感によって書かれ、間違いのない神の言葉であることを信じない人がいるなら、その人とミニストリーとは何の関係もないと私は考えます。悲しいことに現在アメリカでは50%の牧師や働き人がこの基準に達していないと思われます。なぜ彼らは自分が信じてもない本から教えるのでしょうか。もしあなたが聖書は神の靈感によって書かれたと信じるなら、そのままを教えることが義務です。どんな方法であれ、聖書を知って下さい。そして聖書に心から応答しなさい。パウロがテモテに言ったように「あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。」(第二テモテ 2:15) あなたは聖書をどのように学ぶかについて教えてもらうことはできますが、聖書を学ぶ道のりは決して終わりがありません。私自身今日に至るまで、神の言葉に心から応答することと神の言葉を学ぶことを心に決めて続けてきました。それは他でもない神から認められるためにやっていることなのです。」私もチャックの言葉を受けて、本当にこの通り心に決めて、神の言葉をフルタイムで生涯献身して学ぶことをしております。そしてそれを皆さんにまっすぐに説き明かすべく、神に仕える良き働きを為すべき者として、やはりなおも続けて御言葉を学ぶことを職業とするものであります。皆さんにも神の人になって頂きたいと思ひます。「私はとてとても。牧師じゃないし、聖書教師でもないし。」と思わないで下さい。皆さんにも聖書が与えられているんです。聖書は皆さんのものです。そしてこれを皆さんが目的に沿って学ぶ時に、必ずこの目的は果たされます。あなたは神の人となり、良い働きをなす神の働き人になれます。良い働きをしたければ、聖書を学んで下さい。「なかなか奉仕が出来ません。」という人は、ますますもって聖書を学んで下さい。そうしたら良き働き人として、良き奉仕が出来るようになります。「能力も資質もありません。視力もありません。何も出来ません。私はおんぶにだっこのお荷物。」だと思わないで下さい。「何の役にも立たない者だ。」と思わないで下さい。聖書を学べば学ぶほどあなたは神の人として完成され、そして良い働きを担うことが出来るようになります。ただの頭でっかちになるのではありません。その目的で学ぶならば、あなたは必ず神の良い働き人に、ミニストリーに必ず与る者になります。

今日はこれで終わりたいと思ひますが、**4章**、最終章となります。パウロの絶筆の中でも、本当にこれは最後の最後の言葉です。次回、多分最終回になると思ひますので、楽しみにして下さい。神の働き、奉仕、教会のミニストリーに与っている者、それを目指している者、牧師の人たち、牧師を目指している人たち、神学生は全員、この牧会書簡と呼ばれるテモテへの手紙、教会のリーダー、長老、執事、その人たち、それを目指している人たち、是非この牧会書簡を学んで下さい。とりわけ**第二テモテ**はパウロの最後の絶筆の最後の最後の言葉ですから、最重要なことが書いてあります。これを知らないで神の働きは出来ないと思ひて下さい。これを知らずに教会の奉仕は出来ないと思ひて下さい。しっかりこれを学んで、今まで以上に良い働きを担って頂きたいと思ひます。では、今日はこれで終わりたいと思ひます。